日本教化のためのカリフォルニア日本人伝道

——E・A・ストージの日本人伝道・教育観の形成——

吉田　亮

はじめに
一、日本教化のための在米日本人伝道
諸派による位置づけ
アメリカ人クリスチャンの義務
日本人の資質
「明白な運命」
二、ストージの日本人伝道赴任の経緯
福音会
ハワード長老教会
長老派在米中国人伝道部
日本人長老教会の設立
カーリントンの任用
「カリフォルニア・プラン」
日本人伝道への関与
日本人学校教師への任命

ストージの辞任
タイ伝道
三、一八九七年伝道局決議
ストージの再赴任
一八九七年外国伝道局決議
カリフォルニア地元教会の反応
排日問題
四、日本教化のための伝道・教育
伝道方針
基督教青年会
教育方針
教化活動の成果
むすび

はじめに

本研究は世紀転換期の在米日本人へのキリスト教伝道とアメリカ化の関係をプロテスタント諸派の「異教徒」伝道観・伝道政策の観点から考察しようとする試みの一つである。世紀転換期におけるアメリカ・プロテスタント諸派はアメリカ「キリスト教文明」の護持のために世界各地から押し寄せてくる「異教徒」の移民を教化し、全世界をキリスト教化せんがために大量の人材と資金を投じた。カリフォルニアの日本人伝道もこうした歴史的脈絡の中で繰り広げられた。本稿で問題とするのは在米日本人伝道が外国伝道の一部として開始されたという事実である。何故か在米

中国人・在米日本人・在米韓国人に対する教化事業だけはかなり長い期間にわたって外国伝道の範疇にいれられ続けていた。常識的に考えるとアメリカ国内に在住する人々に対する伝道は内国伝道に関わる事であり、海外向け伝道を対象とする外国伝道ということにはならないはずである。そこには何か特殊な裏付けがあったのだろうか、そしてその意図は何であったのだろうか。

こうした傾向はハワイでの日本人伝道にもあった。ガラガー（Mark Edward Gallagher）は、ハワイのプロテスタント諸派は第一次大戦頃までアジア系移民を回心させ彼等が帰国後福音伝道を担えるようにすることを伝道スローガンとして掲げていた、更にハワイのアジア系移民の大半が帰国しないことがはっきりした後もプロテスタント指導者は一九一九年頃までハワイで移植された信仰がすぐに東洋や太平洋諸国で開花するという確信を持ち続けた、と指摘している。[1] 筆者はすでにハワイの日本人伝道が日本伝道の一部として行われたこと、その位置づけに元日本宣教師O・H・ギューリック（Orramel H. Gulick）の関与があったことを示した。[2] アメリカ本土での日本人伝道についても先稿「カリフォルニアの日本人とキリスト教」（同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』PMC出版、一九九一年）で、日本人伝道を担った主要なプロテスタント教派は制度上、在米日本人伝道を日本伝道との関わりで開始したことをすでに述べている。ごく端緒的には在米外国人への教化事業をその祖国に対する伝道の延長上に展開させたとしても不思議ではない。しかし、長期的な事業を成り行きと断ずるのはアメリカにおけるキリスト教会の役割を軽視することとなる。それが国民的にも政策的にもアメリカの基盤となっていると一般に信じられているからである。御し難い相手を前にこの神話の成し得たことは何だったのだろうか。本稿では前稿で紙数の関係で展開できなかった、在米日本人伝道が日本伝道の一環として位置づけられるに至った背景、理由、意義等について検討していきたい。

本稿では長老派をケーススタディとしてとりあげる。長老派はメソジスト派、会衆（組合）派と共に在米日本人伝道での主流教派であり続け、当時のプロテスタント教界の考え方の多くを反映していた。同派在米日本人伝道・教育を平信徒宣教師として一八八六年から一九二二年まで担当したE・A・ストージ（Ernest A. Sturge）は外国伝道局宣教師を辞任する直前まで在米日本人伝道を日本伝道の一環として位置づけていた。この方針が形成されるまでに、日本人を直接迎え入れたカリフォルニア地元教会、日本人伝道を管轄した外国伝道局、並びに現場で働くストージとの間で長い駆け引きが繰り広げられていった。「異教徒」伝道の責任を巡って三者三様の立場があり、立場の違いはそれぞれの利害もさることながら、究極的には外国人「異教徒」をキリストにある隣人として受け入れるのかどうかというナイーブな問題にどこまで真摯に取り組んでいくかという姿勢の違いから来ていた。日本人伝道を外国人伝道と把えるかどうかの問題は単にどこが管轄するかということではなく、自らの信仰を問われる事柄であった。一章では日本人伝道に関わった代表的プロテスタント諸派がどのような根拠付けをして在米日本人伝道の積極的位置付けをおこなったのかを見ていく。二章で長老派が日本人伝道を開始するに至った経緯を、サンフランシスコ地元の教会と外国伝道局及び在米中国人伝道部と、ストージとのやりとりから見ていく。三章では外国伝道局と地元カリフォルニアの教会が引き続き日本人伝道の責任主体を巡ってもめていたこと、その際排日問題が大きな影響を及ぼしていたことを一八九七年の外国伝道局決議を中心に検討する。四章でストージが行った教育活動とその成果を検討することで、在米日本人伝道が日本伝道の一環として実質的に機能していたのかどうかをみる。

この考察によって諸派の在米日本人へのキリスト教化、アメリカ化という問題に対する基本的な姿勢が、ひいてはここに世紀転換期のプロテスタント諸派の「異教徒」に対する世界観、伝道観の一端が明らかになろう。更に、アメリカ・プロテスタントによる日本伝道の新たな形態を提示することになろう。(3)

一、日本教化のための在米日本人伝道

諸派による位置づけ

プロテスタント諸派は在米日本人伝道を日本伝道と結び付けて把えようとした。こうした外国伝道とアメリカ国内の伝道を繋いで考えようとするやり方はすでに在米中国人伝道に見ることができる。

長老派については後述することにして、メソジスト派のカリフォルニア年会記録には、日本人伝道がギブソンの管轄する中国人伝道の一部として行われていた一八八〇年代前半において、その伝道がカリフォルニアのみならず「異教徒の国」（heathen land）の伝道に役立つとすでに考えられていたことが伺える。[4] 一八八六年から日本人伝道総理となったM・C・ハリス（Merriman C. Harris）も就任後すぐに「多くの日本人の回心者が帰国し、熱心なクリスチャンとして生活している」と報じている。[5]

一八九〇年代に入って出稼ぎ労働者の数が急増し始めてもメソジスト派伝道局ミッショナリー・ソサイティの一八九二年度報告は「現在二五人が主のために日本で献身的に働いている。[6] そのうち一〇人はすでに按手礼を受けた牧師である。この伝道活動（在米日本人伝道—吉田）が日本に及ぼす影響は特筆すべきである。……」と告げている。また同報告（一八九七）ではメソジスト派が在米日本人伝道開始当初より力を入れていた教育事業についてふれ、在米日本人の多くがミッション付属の学校で英語を学んだ後公立・私立の学校への転入学を果していることを「ひじょうに重要な局面である。多くの教会の学校で教育を受け、援助を受けた日本人達の多くが今日本の諸方面で重要な召命を受けて働いている」と評価してる。

メソジスト派の日本人伝道着手は早く一八七〇年代からであった。一八八一年に同派の外国・内国伝道を一手に引き受けていた伝道局ミッショナリ・ソサイティが中国人伝道部の傘下として日本人伝道を管轄することになり、一八八六年には元日本宣教師ハリスを在米日本人伝道総理として迎え独立したミッションとして管理させた。一九〇七年に同派のミッショナリ・ソサイティが外国伝道部と内国伝道部に分かれた際に日本人伝道は内国伝道局の管轄となった。それでも一九〇九年に日本人伝道部総理ジョンソン（Herbert B. Johnson）は、日本やアメリカで回心し訓練を受けた多くの日本人クリスチャンが双方の国で働いており、在米日本人伝道と日本伝道が「相互関係、相互依存」でつながっていること、そして当地で受けた教育はアメリカ、ハワイ、日本、朝鮮、中国など広範囲に活用されている、「言語の一致、日本人の知性、日本人移民が日本帝国のあらゆる地域出身であることがすべてこのことのために寄与している」と述べ、祖国伝道への寄与を積極的に評価している。(7)

会衆派は長老派やメソジスト派、聖公会よりやや遅れてようやく二〇世紀に入ってから日本人伝道を開始した。その内国伝道局アメリカ宣教協会（American Missionary Association）やその機関誌 *The American Missionary* で、当地の日本人をクリスチャンにして祖国に送り返すことがキリストの名の下に東洋を征服するのに役立つと述べている。(8) 同紙ではまた在米日本人への伝道活動が日本伝道を担っているアメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）の活動を援助することになる、と述べ内国、外国両伝道のつながりを語っている。(9) ちなみにアメリカン・ボード自身は在米日本人伝道実務的には一切タッチしなかった。

一九一〇年より在米日本人伝道を開始した改革派もその機関誌 *Reformed Church Messenger* で、この伝道の必要性について以下のように述べている。(10) もし同紙の読者諸君の心に「なぜこの伝道が必要なのか、これは外国伝道ではないのか?」という疑問が生じたら、しばしの間太平洋岸の日本人への伝道をひじょうにはっきりと定義し決定付

けているふたつのことを思い出せばよい。在米日本人への伝道はアメリカ在住の日本人改革派のクリスチャンを奨励し組織化するためであり、キリストを知らない日本人を回心させて祖国にいい影響を及ぼすためである。そのために改革派は森淳吉をサンフランシスコに派遣したのであるが、森の心は広大な地域で有効な伝道活動を行えるという幸運に恵まれたという揺るぎない確信でいっぱいであり、その伝道活動で祖国へキリスト教の力強い影響を与え日本帝国の最終的な回心にまで導く事になる、と。改革派は一九二一年七月の内国伝道局の年会で太平洋岸部（Department of the Pacific Coast）を設立してE・エブメーヤー（E. F. Evemeyer）を総理に任命した。在米日本人伝道はここで太平洋岸部に属することになるのであるが、「当該部は我々の教派の伝道の点で大陸を横切ったことになり、しかも日本と中国での我々の外国伝道とを繋ぐものとなるだろう」と機関誌に報じている。(11)

一九二〇年サンフランシスコで内国伝道協議会（Home Mission Council）主催による東洋人伝道に従事する教役者会が開催された。アメリカン・ボード、長老派伝道局、改革ルーテル、メソジスト内国伝道局、内国伝道協議会の代表が集まり、諸派を代表して会衆派東洋人伝道局総理ヒンマン（George Hinman）、メソジスト派太平洋岸日本人ミッション総理ジョンソン、長老派太平洋岸日本人伝道局総理ストージ、ステファード（Stephard）、S・エリス（Sarah Ellis）が発表した。全体として「東洋人伝道は東洋人のキリスト教化とアメリカ化で大きな成果を上げた、さらにその効果は彼らの祖国にまで及んだ。伝道の影響力は増大しており、その必要性はひじょうに大きい。教会は実質的な支援を継続すべきである」（波線吉田）という認識で一致した。(12) こうして一九二〇年初頭に至るまで在米日本人伝道は日本伝道に役立つという見方がなされていった。

こうした教役者たちの自己評価の根拠となる伝道着手そのものへの意義づけを次に考えてみたい。

a、アメリカ人クリスチャンの義務

まず考えられるのは、異教徒である日本人をキリスト教化するのは義務であり、責任であるという意識が彼らに強く働いていたということである。太平洋岸地域長老派機関誌 *Pacific Presbyterian* (October 3, 1912) 掲載のC・ヘーガー (C. R. Hager) による "A Plea for the Oriental to the Christian Church of America" にその典型が見られる。

どのようにしてこれらの東洋人やその他の移民がキリストの福音に到達できるのか? 我々は彼らが共和国の市民になる問題を解決しようとしなくてもよい、しかし神の子の福音の全てを彼らに伝える責任がある、そして我々は我国で彼らのためにできる活動については弁明の余地がない。ある意味で神は移民達がキリスト教信仰と神の愛のレッスンを学ばせるために彼らをここに連れてきて下さったのであるから、我々の側では彼らがアメリカに来ることを認めた神について教えるという責任を回避することはできない。……

異教の地に宣教師を派遣しながら我国にいる異教徒を教育しないというのは賢明でないし正しくない。……

我々は「人間の同胞主義」について多くを語ってきた、しかしいつでもその意味するものが白人種の同胞主義であり、時にはすべての白人すら入っていないことがある。我々はしかしキリストが全ての人々のために死に、アメリカ人やヨーロッパ人同様ヒンズーや中国人の魂もキリストにとって尊いということを思い出すべきである。

メソジスト派でも、アメリカに渡ってくる「異教徒」への伝道は外国伝道同様に緊要であった。一八九四年度同派カリフォルニア年会記録は、[13]

我々はインドや中国の暗黒について奮起させられ、海の彼方に教えを受けていない貧しい数百万人の人々がいることを気の毒に思う。しかしこれら数百の人々が我々の戸口の側にすでに住んでいることにはあまりにも無関心である。サンフランシスコよりアジアの方が異教徒の魂は値打ちがあるとでもいうのだろうか?……我々は一国家として我国にすでに住んでいて多くの場合学ぶ事に飢えているこれらの人々を手助けするチャンスがある事をほとんど無視している……はるか彼方の地のための犠牲を伴わ

ない哀れみは比較的易しいが、時には一種の悲しい贅沢となる。

と述べ、外国伝道を云々する前にアメリカに住む外国人への伝道にクリスチャンとして責任を感じるべきであると訴えている。

移民のキリスト教化がどうして義務であるのかについてフランク・グッドウィン（Frank L. Goodwin）は“Orientals in America”（*The American Missionary, January* 1910）で激しい意見を述べている。

東洋人伝道の問題はそれがアジアであるかアメリカであるかということである。……
アメリカの共和制を安全に保つ事とこの国の異教徒に戦闘的にキリスト教伝道を行う義務とは堅くつながっている。義務と安全はひとつである。
無数の非キリスト教徒が米国の岸辺に押し寄せており、全く反宗教的・キリスト教的な力をもつ海がキリスト教文明やキリスト教的真理の純粋な泉を攻撃している。我々の安全はこの純粋性にあり、つまり我々のキリスト教信仰とキリスト教的熱意が充分に充満しているところにある。道徳的熱心さと神への信頼という二面性をもつ純粋な宗教がその防御となる。

b、日本人の資質

初期の在米日本人の多くは、祖国の近代化のためあるいは自己の能力開発のため先進文明を学びとろうとする若き書生や商人達であった。知的エリートである彼等は諸派にとって好ましい伝道対象であった。長老派外国伝道局機関誌 *The Church at Home and Abroad* 掲載の“The Japanese in America”（July, 1893）でストージは、「大半の伝道館のメンバーは“Samurai”であり、“Japanese Knights”（日本人騎士）の古い秩序を継承している。彼らは普通母国語で高い教育を受け、簡単に英語を習得する。彼らが同胞より受ける尊敬の念のために、将来同胞にすばらしい影響を与える事は間違いない」と述べている。彼を感激させたのは階層に対する価値観ではなく、儒教的道徳観を

身につけ、かつ新国家建設に熱意を抱く青年の向上心であった。それをストージは「サムライ」という言葉に集約させて形容した。一八九〇年代後半から出稼ぎ現業労働者の数が増加し当州の日本人人口の大半を占めるようになっても、彼は「サムライ」を中心とした日本人伝道の必要性を主張した。[14] こうした「サムライ」書生への思いは日本人伝道に関わった当時のアメリカ人クリスチャン達にある程度共通していた。彼等はすでに在米中国人への伝道、また彼らの祖国日本への伝道をも手がけており、そうした経験からも彼らを認識するのであった。早くから日本人伝道に着手していたメソジスト派もこの点に着目していた。メソジスト派ミッショナリー・ソサイティ一八八七年度報告は、在米日本人の目的が英語を学び、教育を受け、キリスト教国の力強い文明の秘訣を修得することであり、多くが「サムライ」(Samurai)か「武士で身分のある階層」(soldier-gentry class)出身である、と報じている。[15] そしてこうした書生達が発散する目的を達成しようとする熱意や自己犠牲的な精神はアメリカのクリスチャンの同情と善意に強力に訴えるだろう、としている。ストージとともに初期の日本人長老教会を指導していたA・ケール(Alexander Kerr)は以下のようべた。[16] 長老派ミッションのもとにいる大半の日本人はほんの数年しか当地に居るつもりがない若者である。彼らは宗教や科学、文学を学びたがっている。彼らは日本に根強くあるいわゆる「異教主義」の大衆とは次元が違う。だから彼らは学んだ教えを自由に受け入れることを妨げられたりあるいは彼らに対してその教えが正当な効力を発揮するのを妨害されたりするようなことはない。彼らは感受性の高い時期に当地に来ており、彼らに感化を及ぼすものによって感動し、変化し、多くがクリスチャンとなる、と述べて日本人書生が特別な人々である事を強調した。会衆派のアメリカ宣教協会でもその機関誌 *The American Missionary* (September, 1902) でP・ウッドバリー(P. F. Woodbury)が報告した他、[17] 同様の報道がみられる。[18]

こうした有能な日本人は間違いなく日本のキリスト教化に寄与してくれるとストージ、ハリス等は信じていた。ハ

リスは日本人伝道赴任直後メソジスト派ミッショナリ・ソサイティ機関誌 *Gospel in All Lands* (August, 1886) で、幾人かの日本人はすでに帰国し、祖国の教会のために貢献していること、だから「このミッションによる影響力には大きな期待がもてる、こうして多くの若者は祖国の人々に高度な文明を伝えるために帰国するのである」と述べている。同派は日本人伝道の専任者としてハリスを日本からわざわざ招聘した。ミッショナリー・ソサイティ一八八七年度記録には以下のように記されている。(19)

> 太平洋岸での我々のアジア人伝道の成果は何であろうか？ 彼らがずっと移動している限り大きな永続的な教会をアメリカに建てる事はできない。我々の伝道の永遠の成果はここではなく、彼らの祖国に現れる。数年間 "Far Cathay" の息子達は我々の影響と教育を受け、西洋の宗教・科学・文明と接し、新時代の光、自由な制度の原理、神の不滅の真理の種を携えて祖国に帰る。それらは祖国で植え付けられ、我々が伝道を成し終えて我々の名前が忘れられた後に力となる……
> すでにギブソンの下で訓練された日本人が帰国し、伝道に従事している。……

在米日本人書生の学習意欲はアメリカ人クリスチャンにとっては目を見張るものであり、日本伝道に寄与できるものと映った。そして日本人達はアメリカ人クリスチャンが最も伝えたがっているものを修得しようとしていた。(20)

在米中国人と在米日本人は同一視できないという認識も重要であった。この問題は中国と日本の認識ともつながっていた。祖国日本へのイメージから得た在米日本人への認識は、アメリカ人クリスチャンが在米中国人と在米日本人との違いを明確にするのに役だつことになった。*Gospel in All Lands* (January, 1886) は二国民の違いについて、日本人は「当地に勉学のために渡って来ておりすでに迷信から開放された受容力をもっている。そして彼らはすでに祖国で聞いた事があるキリスト教でも不可知論でも何でも新しいものを取り入れる用意がある」。それゆえ日本人の方が教会の成長が早い、と結論付けている。日本は中国より西洋文明化が進んでおり、日本人はアメリカのキリスト

教文明を充分理解する能力を持つ人々であるという認識は、後述するようにプロテスタントの日本人伝道を中国人伝道の一環として位置づけるのではなく、独立したミッションにするという伝道政策にも影響を及ぼしたのである。ケールの "Japanese in the United States" (1890) では、「これら二国から我々の所にやってきた人々は渡米目的及びその社会階層においてひじょうに違う。数年前まで日本人は概して「soldier-gentry class」出身であった。彼等の目的はお金のためよりも英語の教育を受けることであった。他方中国人は農民出身であり金儲のみのために来ている。……」と報じている。アメリカ宣教協会が中国人伝道の一環として日本人伝道を細々ながら正式に開始したのは一八八二年であったが、その数年後には日本人と中国人とを同一扱いしないようになっていた。H・ビーチ (Harlan P. Beach) もケール同様の発言をしている。[21]

初期在米日本人は現地アメリカ人クリスチャンにとっては中国人より好ましい存在となっていた。その理由は当時激化の一途を辿る中国人排斥のために中国人人口が減少しコミュニティも非常に弱体化してしまったことがあげられる。在米中国人はもはや成長の望みの薄いうま味の少ない伝道対象となっていた。そこへ目新しい伝道対象として現れた日本人は、都合良くもアメリカが最も誇りとするキリスト教文明を学ぶためにやって来ていた。在米アジア人伝道に関わる教役者たちが飛びついたのはこうした反動のようなものがあったからである。

次に在米日本人への肯定的なイメージは、書生のアメリカ文化への適応力への評価に象徴的に表れており、ここでも在米中国人と一線を画していた。ストージは "Mission Work Among Japanese in America-Its Influence in Japan" (*The Church at Home and Abroad*, July 1894) で、日本人は「日本的なあらゆるものを捨て去り、アメリカ的なのもは何でも受容する。彼らは自らの宗教（少しは持っている）を日本の衣服とともに祖国に置いてきた。……古いものは捨て去られ、彼らは何でも新しいものを受け入れる用意がある」と述べ、日本人の適応力、受容力を

誉めている。メソジスト派の *Gospel in All Lands* (July, 1886) も、西洋文明を摂取した日本は早く迷信や野蛮主義から脱して文明国になった。そして日本人の幾人かはキリスト教化され、日本人はアメリカ人が与えるものは何でも受け入れる、と報じている。[22]

さらに、一八八七年代の地元紙 *Chronicle* も日本人の適応力を高く評価する記事を掲載していた。[23] 日本人は中国人とは違って祖国の「近代化」のために西洋文明の真髄を学ぼうとアメリカに渡ってきており、渡米してくる日本人は文明化された民であり、それゆえアメリカの文化への適応力も優れている、こうした理解はアメリカ人クリスチャンの側からの価値観により判断されたものである。アメリカの「キリスト教」文明を最高のものであると自負する彼らは、自らの文明を積極的に受け入れたり、学んだりしながらアメリカの文明に倣おうとする国民や国家を高く評価したのである。

c、「明白な運命」

在米日本人伝道が祖国伝道の一環であるという考えはアメリカに流入してくる「異教徒」をキリスト教化する一方で異教の国々へのキリスト教化も推し進め全世界のキリスト教文明化をはかろうという使命感の一表現でもあった。「明白な宿命」という言葉に代表される、アメリカ・プロテスタントの絶対的な使命感はこの世紀末に最も高揚していた。アメリカは世界で最大の自由、最も純粋なキリスト教と最高の文明を代表するものである。このアメリカこそが、他の世俗的な人々を造り変え、文明化するのはあまりにも当然なことであると確信していたのである。*The American Missionary* に掲載された会衆派指導者のひとりC・ナッシュ (Charles A. Nash) の "Orientalism and Christianity at Home" (August, 1911) はアメリカのキリスト教文明の世界史的役割について次のように述べている。

特に我国でのキリスト教伝道は東洋人に対しても彼らの祖国に対してもすばらしい仕事をおこなっている。……

回心した東洋人のすべてが帰国してキリストの宣教師になっているというのは決して言い過ぎではない。カリフォルニアの伝道を手伝うあるひとが「私は外国宣教師を訓練している、そして充分効果をあげている」と言っている。彼らは我々のキリスト教の土壌で東洋主義とキリスト教とが出会う重要な場所にいる。そこで彼らは運命づけられた征服かもしくは東洋主義が選ばれ、東洋をキリストの王国に変革する最も有力な要素となろう。……

西洋人であっても東洋人であっても移民はまだ試験段階であり……我々は移民をもっと正当に優しく処遇すべきであるが、彼らを厳しくアメリカの標準にとどめさせるべきである。この国はキリストとキリスト教文明に連なっており、決して劣等なタイプと運命に身を任せてはならない。……

アメリカのキリスト教と文明はまた多数の移民の流入によって試験段階にはいっている。……

我々の最低でなく最大の務めは世界への責任である。しかし、アメリカの高尚な運命は神聖な信頼に基づくものである。世界を救うためにアメリカを安全に保つべきである。……もし政治、産業、教育、宗教の分野で我々の持てる力で移民をキリスト教国家に集められるならば、キリスト教的西洋はまだまだ続いていくかも知れない。

移民のキリスト教化はアメリカのキリスト教文明の維持と世界のキリスト教文明化の前にあっては成されるべくして成されるあまりにも当然の「明白な宿命」だったのである。[24]

アメリカ・プロテスタントの揺るがない伝道使命感に支えられて一見もっともらしい根拠で日本人伝道が行われていたようであるが、こうした見解が個々の教派や教界全体に十分理解されていたわけでは決してなかった。実際現場の宣教師達はカリフォルニアの地元教会や外国伝道局から必ずしも全面的な支援、協力を受けていたのではなく、時には孤独な戦いを余儀なくされたのである。**表1**はカリフォルニア地元教会、教会員の近隣日本人ミッションや教会への援助状況を一覧にしたものである。形態として圧倒的に多いのは学校、日曜学校、幼稚園等教育活動への人員派遣であり、他には財政援助（経常費または会堂確保の際）や聖日礼拝、礼典の手伝いなども少なからずある。日本人教会

にとって学校運営はアメリカ人の協力無しには到底できることではなかった。特にサンフランシスコの美以英和学校などはレベルの向上と維持のために優秀なアメリカ人スタッフをひとりでも多く確保しようと非常に苦心していた。日本人伝道に協力する場合、大半が善意の個人としてであり、教会として関わる場合は極めて少ない。結局カリフォルニアの日本人伝道は担当宣教師の血の出るような努力と数少ない地元のボランティア達に支えられて伝道基盤を固めていったのである。

二、ストージの日本人伝道赴任の経緯

福音会

一八七〇年代アメリカ太平洋岸の玄関口であるサンフランシスコにはすでに日本人のグループが組織されていた。一八八〇年以前にカリフォルニアに渡ってきた日本人の大半は書生であり、アメリカへ就労を目的に来たのではなくいわゆる西洋文明を学ぶためにやってきていた。彼等は家事手伝い、庭師などスクールボーイとして家内労働に従事しながら現地の学校で勉強を続けていた。こうした書生達の中で会衆派、メソジスト派に連なる日本人クリスチャンが集まって在米日本人最初の団体である福音会が一八七七年一〇月六日に設立された。(25)

その後福音会はメソジスト派中国人伝道総理オーティス・ギブソン（Otis Gibson）の指導を受け、会員中より美山貫一他メソジスト教会員となる者もあった。しかし一八八一年、メソジスト派のグループやギブソン及び中国人と行動を共にし得ない会員が分離独立してタイラー福音会を結成した。その後、一八八三年にも再び分裂がおこり、この時分離したグループはステヴンソン福音会を組織した後、タイラー福音会へと合流した。

ハワード長老教会

このタイラー福音会に対してハワード長老教会の牧師ロバート・マッケンジー（Robert Mackenzie）と長老J・B・ロバーツ（James B. Roberts）が会の要請を受けて諸集会を補助したり、夜学校を手伝ったりした。[26] ロバーツの外国伝道局宛書簡（Roberts' Letter to Ellinwood, October 27, 1884）はタイラー福音会とハワード長老教会との関係、当時の福音会員の様子を端的に語っている。[27]

約七年前に、この町に「日本人福音会」（"Japanese Gospel Society"）が組織された。約一八ヵ月前、私は彼ら（タイラー福音会員—吉田）に聖書を講義するよう招待を受けた。数ヵ月間、週一回夜の講義をし、その後二週間に一回となる。……
私は八～一〇人の生徒で講義を開始し、その後人数が増え、今ではクラスに二〇～四〇人の生徒がいる。そのうち数人は時間がとれないために不定期な出席者であった。生徒のうち一二人はハワード長老教会の会員（ロバート・マッケンジーが牧師）であり、総じてよいクリスチャンで、数人は模範的なクリスチャンである。福音会員の数人は他教会の会員で、その他はノンクリスチャンであるが、みんな熱心に真理を知ろうとしているが、異教徒がひとりいることを現段階で我々は知っている。……
現在福音会には六〇人の会員がおり、二〇人以上がまもなく会員に加わる、そしてすぐに一〇〇人を越え、彼らを直接ひとりの宣教師の指導下におけると思われる。[28]

ロバーツは増加しつつある日本人への伝道の必要性を痛感し、専任の宣教師派遣の実現を計った。前掲書簡で彼は次のようにその理由を述べている。

我々の教会がこの国柄の人々（日本人—吉田）に特に関心を払うべき時が来た。日本の徴兵制度によって、最も将来性のある多くの若者が兵役を逃れるために、軍隊生活よりもはるかに高度な目的をもって自分達の立場を良くしようと、西海岸に渡ってきている。
二カ月前に、私はルーミスと日本人伝道について協議した。彼はJ・バラ（J. Ballagh、日本宣教師）のアドバイスを受ける

よう述べた。バラはこの町に短期間しか滞在しなかったので、彼とはほんのしばらくしか会えなかった。誰かがこちらに伝道局のために派遣されて、日本人のために宣教師または教師として全ての時間を割いてくれることが望ましいという点で、我々は意見が一致した。

バラはこの問題を伝道局に提案するようにすすめた。そして彼は可能な限り日本人のために宣教師を確保する努力を支持すると言ってくれた。……

我々は彼らの魂のために、我々自身のために、そしてここに在留する日本人や祖国日本によい影響を及ぼすようになるために、彼らにもっと関心を示すべきである。……

我々の伝道局が今、年額数千ドルの費用で宣教師（missionary teacher）を派遣してくれることが最もふさわしいことだと思う。

この手紙にはハワード長老教会牧師R・マッケンジー及びその他（N. A. Scott, S. P. Sprecher, A. W. Loomis, James D. Norton）によるロバーツへの支持表明書が付いていた。ロバーツは太平洋を隔てた「異教徒の国」からやってきた隣人にキリスト教を伝えたいという素直な使命感からこの手紙を伝道局に出したと思われる。アメリカ人クリスチャンが日本人への伝道に責任をもつには外国伝道局が宣教師を派遣すべきであると彼は考えた。なぜ地元の教会が責任を持てないのか、アメリカ在住の日本人への伝道を外国伝道局が担わなければならないのか理由付けはなされていない。在米日本人の多くが一時滞在の書生であり、学業を修めた後帰国するという傾向を察知して、彼等の祖国日本への伝道を行っている外国伝道局が担当すべきであると自然に考えたのかも知れない。また同派の在米中国人伝道がすでに外国伝道局の管轄下で行われていたので日本人もと考えたのかも知れない。ロバーツは支持表明書を数点付けることで、この考えが彼だけではなく外国伝道局所属の日本伝道宣教師や在米中国人伝道宣教師他の見解でもあることを示し、伝道局に対してより説得力をもたせようとした。しかしこの後彼の提案は在米中国人伝道宣教師達から反対されることになる。

長老派在米中国人伝道部

カリフォルニアの中国人人口は一八五〇～九〇年にかけて急増した。中国人は当地の経済発展を支える労働力として受け入れられ、主に農場、大陸横断鉄道、鉱山等の現業に就労した。東洋からはるばる太平洋を渡ってやってきたこれら「異教徒」に対する伝道はプロテスタントの主だった教派によってかなり早くから着手された。長老派では一八五〇年代初頭に元中国宣教師E・スピーア（Elizabeth Speer）がサンフランシスコの中国人伝道を開始し、一八五三年に中国人のための夜学校、日曜学校を創立、同年四人の中国人会員とともに教会を設立した。[29] その後A・W・ルーミス（Alexander W. Loomis）、A・J・ケール（A.J. Kerr）、I・コンディット（Ira Condit）などによって中国人伝道が継承されていった。これら中国人伝道宣教師が草創期の在米日本人伝道も指導、援助した。長老派外国伝道局幹事F・F・エリンウッド（F.F. Ellinwood）によると、日本人伝道は「モンゴリアン伝道の一環」（part of the Mongolian Mission）として位置づけられ、コンディット、ケール、ルーミスが当初担当していた。[30] 一八八五年に設立されたサンフランシスコの日本人長老教会に対しても、この三人が発足年から一八九八年まで役員会の議長を務めていた。外国伝道局年次報告でも一八九〇年までは「米国中国人伝道」部門に日本人伝道のセクションが設けられるという扱いを受けており、一八九一年になってようやく「米国中国人・日本人伝道部」に改名されてはじめて公的な記録に「日本人伝道」という名前が記載されるようになった。[31]

この在米中国人伝道宣教師の一人ケールは、日本人伝道についてロバーツの専任宣教師派遣案とは違った考えをもっていた。彼は宣教師を日本人伝道のために派遣する必要はなく、日本人教師を雇用すれば充分であるという意見を伝道局に提示した。ケールの書簡（Kerr's Letter to Ellinwood, January 17, 1885）は、中国人伝道部宣教師三人の日本人伝道に関する統一した考えとして以下のように告げている。カリフォルニアの伝道事業については教師とし

て良い人材を確保したいが、事業そのものは日本人教師が担うべきであるという勧告を伝道局にすることで宣教師達の意見が一致した。理由は四つある。まず効用性であるが、アメリカ人では説教ができないが、日本人ならすぐにでもできる。つぎに、これは政策的な問題であるが、当市近郊の町々にはほんの二〇〇人しか日本人がおらず、そのうち七五人がメソジスト派に関わりをもっているので、残りは七五～一〇〇人しかいない。バラによると、徴兵忌避のための渡米者は大した数にはならないということなので、少人数の日本人達のために宣教師を派遣するのは妥当な政策とはいえない。第三に、費用面でも、日本人教師ならそれほど経費がかからない。最後に、日本人の浮動性についてであるが、日本宣教師バラやヘボンによると、外国で回心したり教育を受けた日本人の四分の三は帰国後キリスト教への関心を失ってしまうという。ロバーツの教える日本人の数人がハワード教会の会員であるというが、同時に彼らは浮動性が強くどこへでも行き、そもそも教会よりも人物との関わりで教会に来ている。それ故日本人人口の増加はこの浮動性を悪化させ、よけいに混乱させることになる、というのである。[32] ケールの書簡から、当初ロバーツに同調していたと思われるルーミスも含めてこれが在米中国人伝道宣教師の一致した見解であることがわかる。

日本人長老教会の設立

ロバーツと中国人伝道宣教師達は日本人伝道について意見の一致を見ていなかった。そうしている間にも事態はハワード教会の主導で進んでいった。ハワード教会は日本人を説得し、サンフランシスコ中会をも動かして日本人長老教会を設立させてしまった。一八八五年四月二四日、ハワード長老教会のロバーツ、中国人伝道総理ルーミス、元タイ伝道宣教師カーリントン（James Carrington）等がタイラー福音会の会員に対して教会設立を勧めた。[33] それを受けて、タイラー福音会内の教会設立希望者は、四月二八日、サンフランシスコ中会宛に誓願書を提出した。[34] 中会はそれ

を認め、ルーミス、カーリントン、マッケンジー、ロバーツを教会設立委員としてタイラー福音会に派遣することとし、五月一六日、一七人の転会者と一六人の受洗者によってサンフランシスコ第一日本人長老教会（First Japanese Presbyterian Church of San Francisco）が設立された。[35] 中会は、この新教会を、専任牧師が招聘されるまで外国伝道局の管轄下に置く事とし、カーリントンが小会（役員会）議長、森田寿三郎、三谷幸吉郎が長老となった。[36] 日本人教会はこうして白人等通常のアメリカ人教会が設立されるのと全く同じ手続きを踏んで設立された。

ハワード長老教会が日本人教会設立を急いだのには幾つかの理由が考えられる。まず日本人の教会を設立することで日本人伝道の礎石を築き、ロバーツの念願の日本人伝道宣教師派遣実現を容易にしようという意図があったことが推測される。そのことを直接示す資料はないが、同教会の責任者として任命されたカーリントンをロバーツは宣教師候補として外国伝道局に推薦している（後述）。次に当初中国人伝道の一部として開始された日本人伝道を早急に中国人伝道から分離独立しないと将来の日本人伝道に悪影響を及ぼすというロバーツ等の配慮があった。一八八〇年代に風靡した中国人排斥運動は在留日本人の自意識に大きな影響を及ぼしていた。[37] 福音会でも中国人ミッションから独立しようとするグループが新たにタイラー福音会を一八八一年に設立し、また一八八三年にはステヴンソン福音会が分離組織された。当時タイラー福音会で聖書を講義していたロバーツは、外国伝道局宛の書簡（Roberts' Letter to Ellinwood, October 27, 1884）で、「当地のメソジスト監督派中国人ミッションのオーティス・ギブソン牧師は数人の日本人を抱えるミッションを担当している。しかし同ミッションの日本人の多くは中国人のことで落ち着かないでいる。だからもしひとりの宣教師か教師がいて日本人の教育に全ての時間を割いてくれるならば、彼らは福音会（タイラー福音会—吉田）の会員になってくれる」と報じ、中国人問題が当時の在米日本人ミッションの有り様を左右していたことを示している。メソジスト派 *Gospel in All Lands* (January, 1886) もこの問題を取り上げ、当初同派の

会員であった日本人の一部が分離して「長老派になった、なぜならば彼らは日本人と中国人が入り交じるのに反対したから」と報じている。[38]

カーリントンの任用

日本人教会に対してサンフランシスコ中会は、一八八四年一二月以来日本人のための教育事業に携わっていたカーリントンを日本人夜学校教師に任命し、日本人教会の説教、祈禱会、聖餐式、学校を担当させる事にした。[39]

しかし、カーリントンの任命で全てが落着したわけではなかった。中国人伝道総理ルーミスは伝道局会計ラーキン（Wm. Rarkin）への書簡（Loomis' Letter to Rarkin, September 3, 1885）でロバーツを批判し、外国伝道局としての立場を明示している。つまり、ロバーツは日本人伝道の委員会を勝手につくって、伝道局幹事と直接交渉しようとしている。エリンウッドの書簡（前掲）が示すように、[40]日本人伝道は「モンゴリアン伝道の一環」として位置づけられ、コンディット、ケール、ルーミスがその担当なのである。日本人伝道は中国人伝道の一部であり、発言権を持っているのは中国人伝道部なのだから、ロバーツが口出しすべきではないというのである。ルーミスの指摘にあるロバーツが作ったという委員会の存在は不明であるが、これまでの日本人伝道が地元ペースで先走りしていることに危機観を感じた中国人伝道部が主導権を奪回するためにロバーツの言動に釘を指そうとしたことが書簡から読みとれる。

一方ロバーツは自らの主張を貫くべくカーリントンを日本人伝道宣教師へ昇格させる働きかけを行ったが、中国人宣教師達からの同意は得られなかった。[41]外国伝道局の議事録（PBFM, *Minutes*, PHS 所蔵）によると、一八八五年一一月一六日のボード会議で幹事エリンウッドが、伝道局に「友人」（ロバーツ—吉田）よりカーリントンを専任宣教

師任命「full missionary appointment」の候補者とするよう提案があったことを口頭で報じている。ボードはこの問題に付いてはサンフランシスコ中会にアドバイスをしてもらうよう決議した。伝道局は日本人伝道問題にこの時点で意識的にかどうかは別にして関わる意志はなく、地元で解決するよう指示したのであった。ところがカーリントン自身が他の教会からの招聘に応じ、一八八六年五月一四日に就任したいのですぐに日本人伝道を辞退したい旨をルーミス達に知らせてきた。[42] さすがにロバーツはこの事態に落胆した。[43] それでも彼はあくまでも専任の宣教師を日本人伝道に任命することにこだわった。責任も権限も極めて小さいアルバイトの外国人（日本人）教師では安心して全てをまかせることができないし、いつまた後任探しに奔走せねばならないかもしれない。宣教師を任命するとなれば伝道局の責任がついてまわり、ロバーツ達地元の教会が負うべき責務がなくなるからである。ストージが日本人学校に教師として任命された後も、彼は書簡（Roberts' Letter to Ellinwood, March 28, 1887）で、「ストージ夫妻は日本人を教え、平信徒の講師としてよくやっている。しかし彼は中国人への医療伝道のためにここに来たと理解している。日本人教会はその霊的なものを面倒見る専任の伝道者をもっていないし、そのような計画もない。たぶん、この教会を設立したのは誤りであった。日本人自身が関わっていたり参加していたアメリカ人の教会に所属すべきであった。または彼らを長老教会が設立されてからひじょうに発展したメソジスト・ミッションに所属させるべきであった」と述べ、伝道局の思い切りの悪さに抗議している。元来自分が蒔いた種であるのにまるで自分には全く責任がないかのような発言である。結局彼の思いはこのストージが一八九一年に専任宣教師として日本人伝道に再赴任するまで実現しなかった。

カーリントンは約一年半で日本人伝道の現場から去ったわけであるが、中国人伝道宣教師たちが受け入れようとしなかった点もさることながら、彼自身にも問題があったようである。ケールの書簡（Kerr's Letter to Ellinwood,

April 16, 1886) は、カーリントンの問題点を以下のようにあげている。カーリントンはすでにレバノン教会牧師に正式な任命を受けているので簡単には変更できない、中会の何人かは彼が宣教師として適任者ではないとして反対している点もある。更に深刻な問題は、彼は日本人夜学校の責任者として成果をあげられなかったことである。彼が夜学校に赴任した後、出席者が激減し、通訳として森田を雇用したりしたが、結局生徒数は増加せず、ついに日本人伝道を投げ出してしまった、というのである。[44] そしてケールは日本人伝道のための宣教師を雇うよりも、あくまで福音を熟知し、熱心で、訓練を受けた日本人教師に夜学校をまかせるべきである、という考えを繰り返した。日本人伝道のための宣教師雇用の件は、候補だったカーリントンの離脱によって行き詰まったままになっていた。中国人伝道部にとっては日本人伝道に関する地元の発言力を握り、思い通りの決着であったかに見えた。しかし逆にこの問題を中国人伝道部の手によって解決する責任を背負わられることになった。

「カリフォルニア・プラン」

ロバーツ、ルーミス他の尽力でサンフランシスコ第一日本人長老教会が設立され、英語学校教師カーリントンを専任宣教師に昇格させてしまおうとロバーツが画策し、ルーミスから批判されていた頃、またこうした二人の奮闘をよそに地方教会の牧師に就任するためカーリントンが在米日本人伝道から立ち去った直後、一八八五年七月頃ストージはタイからサンフランシスコに帰着した。ストージの書簡 (Sturge's Letter to Ellinwood, April 2, 1886) によると、彼はイギリスの叔父からの資金援助をもとに中国人伝道を行う計画をたてており、また中国人伝道は叔父の切なる願いでもあった。ストージは中国人への医療伝道は現状不充分でありさらなる必要性があることを外国伝道局に強調し、加えて叔父から財政援助（二五〇ドル）を得られるので伝道局は少ない財政負担で中国人伝道を展開できるとし、伝

道局から許可を得ようとした。また彼自身が外国伝道宣教師としての任務をちゃんと把握した上でこうした要求をしている事を印象付けるために同書簡で「私としてはタイ、中国、朝鮮などで働きたいのであるが、私の妻の健康状態もあって来春、来夏に外国にいく事は非常にむずかしい」こと、そしてタイ伝道を離れてから次の任地に赴任するまで伝道局に一切賃金支給を求めないことを強調した。[45] これに対して外国伝道局は幹事の書簡（Ellinwood's Letter to Sturge, February 17, 1886）で、一八八六年二月の会合でストージの「カリフォルニア・プラン」（中国人医療伝道）を承認したと回答した。[46]

しかし中国人伝道の実情はストージが考えてたほど甘いものではなかった。長老派中国人伝道総理のルーミスはストージの中国人医療伝道赴任に反対であった。ルーミスにしてみればストージの計画は在米中国人伝道部の働きに対する挑戦でしかなかった。ルーミスは反論を伝道局に書き送っている（Loomis' Letter to Ellinwood, May 3, 1886）。伝道局の決定なしにストージが中国人医療伝道宣教師として赴任することができるのかどうか、外国伝道局の財政状況が急迫しているのに彼を雇えるのかどうか、中国人伝道では医療伝道よりももっと他の部分に力点を置くべきなのであり実際中国人は自分達で医者を賄っている、と。その上でルーミスはストージが中国人伝道に赴任する代わりに、カーリントンの後任者として日本人伝道に暫定的に赴任するように勧めた。

ルーミスはまたストージにも手紙を書き（Loomis' Letter to Sturge, May 3, 1886）、中国人医療伝道を始めるのは無理であることをケールを例にあげて説明した。ケールは有能な医者で中国語も堪能であるが、中国人は中国人の医師しか信用しないために伝道事業をうまく進められなかった。そしてルーミスはストージに、将来中国伝道を目指して語学の勉強のためにサンフランシスコに滞在するか、日本伝道を目指して我々の日本人ミッションで働いてみたらどうか、いずれにせよ健康回復が目的で一時的に滞在するのだから日本人ミッションに従事しながら次の赴任地を

捜したらどうか、と提案した。

ルーミスの手紙はストージに大きな動揺を与えた。彼は書簡（Sturge's Letter to Ellinwood, May 21, 1886）でふたつの可能性について述べている。それは将来中国の広東への赴任を期してここで中国語を勉強するか、釜山に医療宣教師として赴任するのを前提としてここで在米日本人への伝道を手伝うか、というのは釜山には日本人の町があり日本語を修得しておけば役立つ、という選択支であった。[47] 後者の選択支については、彼はすでにタイを離れる前に朝鮮を次の伝道地として考えたことがあり、一八八五年自らの朝鮮における医療伝道の計画と長老派の在朝鮮宣教師アレン（Allen）の推薦状を外国伝道局に提出し、それに対しては伝道局からの許可も得ていた。[48] 結局この時点ではっきりした結論は出せず、その間彼はフィラデルフィアに旅した後、一八八六年六月一日に再びサンフランシスコに戻り、ルーミスの斡旋で日本人学校を手伝う傍ら中国語の勉強を始めた。[49] つまり彼はルーミスの勧めに従ったのである。

日本人伝道への関与

ストージの日本人学校での仕事は手伝うというより彼の日常の大半の時間を割かねばならない程多忙であった。しかし、彼の関心はどんどん日本人伝道に惹き付けられていった。ストージは書簡で（Sturge's Letter to Ellinwood, January 3, 1886）次のように述べている。[50]

> 我々がここに来てもう7ヵ月を迎える。あなたも知っているように我々はこの町の中国人に伝道するためにやってきたのであったが、あたかも神のお考えは別のところにあったかのように思える、というのは我々はこちらに到着して以来大半の時間を大変必要性が大きいように感じられる日本人伝道に割いている。昨日、四人以上の日本人書生が信仰を告白し、小さい日本人教会の

会員に認められた。我々が日本人伝道に着手して以来、七人の少年達が信仰の道を歩むよう導かれ、他の者達は救い主の愛、信頼について学んでいる。……

時に私は、われわれが着実に毎月のように重要性が増しているこの仕事（日本人伝道—吉田）に召されなかったのかと不思議に思う。この町に来る日本人は着実に増加しており、誘惑がいっぱいあるまっただ中にキリスト教的な奉仕をせずに彼らを放って置くべきではない。私は現段階でもう一年叔父から援助を得られるかどうかはっきりしない。叔父が約束した援助というのは中国人への医療伝道を行うためのものであった。そうした事業はそれほど必要であるとは思えない。

私は通訳も無償で薬を配給することもせずに、私のできる事をなしてきた。我々は日本人に行った事業の結果にしかし本当に満足している。恐らく叔父は日本人伝道のために継続して我々を援助してくれるだろうが、もしそうならなかったら契約期限が切れた後我々はこの事業を放棄すべきでしょうか。……（波線筆者）

ストージは当初の目的であった中国人伝道計画を完全に放棄するつもりではなかったが、日本人への教育事業に関わる事によって日々増加している日本人伝道の重要性を痛感し使命感すら持ちはじめていた。それにひきかえ、中国人伝道の方は自分が専心するほどのものではないと思えた。これにはいくつかの理由が考えられる。一八八二年に制定された中国人排斥法の影響で中国人人口そのものが減少傾向にあったのに反して、日本人人口は増加の一途にあったこと。すでに中国人医療伝道の可能性がルーミスによって断たれたこと。もっと決定的なことは、当初不本意ながら手伝っていた日本人伝道に、徐々に使命感・召命感を感じるようになっていたことである。実際何人かの日本人の回心者も出、教会員数も増加していた。ストージはタイ伝道で行ったような通訳や薬の無償配給はやらずに、英語教育によるキリスト教化のみを行っていた。医師としての経歴、医療宣教師としての経験を犠牲にして、いわばストージでなくてもやれる英語教育に従事することにしたのである。まだ本格的な組織的伝道が行われてもいないのに着実な手応えを見せる日本人への伝道にこそ、外国宣教師である自分、さらにはひとりのクリスチャンとしての自分こそが

遣わされ、その責任を果たすべきなのだと考えるようになったのである。その頃のサンフランシスコはゴールドラッシュに伴い、あらゆる富と利権が集中する世俗化の極みにあった。彼の決意はこの西部の町で日本人が「誘惑」に会って毒される前にキリスト教の感化を与えねばという使命感であり、いわゆる世紀転換期のクリスチャンの使命感である「明白な運命」を背景にしていた。ストージにとって日本人伝道に関わる最大の難題は、イギリスの叔父は中国人伝道には関心を持ってくれても、はたして日本人伝道のために援助してくれるのかどうかであった。

日本人学校教師への任命

長老派外国伝道局はカーリントンの後任としてストージをサンフランシスコの日本人学校に赴任させる決定を一八八六年六月二一日におこない[51]、伝道局幹事エリンウッドは本人に書簡で通知した（Ellinwood's Letter to Sturge, July 6, 1886）。伝道局は中国人伝道部ルーミスの指示通りストージを正式に日本人伝道に任命したが、専任ではなくあくまで日本人学校教師として派遣したのであった。状況的には彼はこの任命を受けざるを得なかった。そして彼の心の中では少しずつ変化が起こりかけており、中国人伝道よりも日本人伝道に積極的な意義を見いだしはじめていた。ストージは日本人夜学校教師に正式に任命された後、非常な努力によって、カーリントンを凌ぐ成果を上げ、ルーミスやケールから高い評価を受けるようになった[52]。

ストージの日本人学校教師赴任はロバーツからすれば極めて不充分な任命であったが、日本人伝道の責任、管轄を外国伝道局に押しつけることには成功したのである。中国人伝道部にしてみれば地元教会から負わされた日本人伝道への責務をストージに委せることで当面の責任回避を計った。外国伝道局も専任宣教師を派遣するほどの伝道地でもない在米日本人伝道への責任を託されて困っていた矢先にストージを任命できて対面が保てたわけである。しかも彼

の場合イギリスの叔父の財政援助があったために財政上の負担は憂慮する必要がなかった。ストージにしてみれば夫人の健康状態、当地の日本人伝道の客観的状況の変化、ストージ自身の心理的変化からみて決して不本意な任命ではなかった。しかし日本人伝道問題の経緯を考えると、ストージの赴任は三者が抱え込んだ重荷を彼の肩に無理に背負わせた形のものであり、彼は貧乏籤をひかされたのである。

ストージの辞任

日本人伝道は恒常的な財政問題を抱えていた。当時、市内には日本人へのキリスト教伝道を担うふたつの競合組織があり、それは長老教会とメソジスト・ミッションであった。タイラー福音会が離脱した後も残った福音会グループはメソジスト派の影響下にあった。既述のように同派ミッションには専任のスタッフとして総理M・C・ハリスの他二名の助手が配属され、ハリスは年俸一、八五〇ドルを支給されていた。[53] それに較べると長老派はあらゆる面で不備が目だった。ストージは外国伝道局から正式に任命された日本人夜学校教師であったが、年収はストージの前任者カーリントンに教師給として支払われていた三〇〇ドルと叔父からもらう二五〇ドルだけであり、普通の宣教師の給料より三〇〇ドル少なかったという。ストージの書簡（Sturge's Letter to Ellinwood, August 4, 1886）ではサンフランシスコは極めて物価が高く東部的感覚では到底やっていけなかったが、年間五五〇ドルの収入でなんとか暮らしてはいけたという。しかし日本人伝道のために外国伝道局が支出できる金額は三〇〇ドルが精いっぱいでこれ以上日本人伝道そのものへの援助は望むべくもなかった。伝道局によると、伝道局への地方教会からの寄付が大幅に減少していたために恒常的な財政難であり、支出をできるだけ切り詰めようとしていたからであったという。[54] 実際一八八六年度、八七年度の外国伝道局支出額を見ると総計では二二、〇〇〇ドルの減少、日本人伝道部門が所属していた在米中

国人伝道部でも一、三〇〇ドル強減少しており、しかも六万ドル近く借金をかかえていた（**表2**参照）[55]。こうした財政難はストージの叔父からの援助がなくなればたちまち危機的な状況を迎えることになる。伝道局はストージに対して、もしそうなった場合伝道局は日本人伝道を継続できるかどうかわからないこと、これだけいい成果を挙げているのに断念するのは残念であることを伝えてきたという。[56]

ストージはこの伝道局の消極的な姿勢を意識してか、一八八七年の日本人伝道の年次報告の中で（Sturge's Letter to Ellinwood, March 30, 1887）、いかに伝道の成果が上がっているかを強調すると共に、日本人のすぐれた自給状況を示して、伝道局に過重な財政負担を要求しているのではないことを力説している。この報告には、日本人伝道の拠点が一八八六年八月末にミッション街一一六三番の立派な建物への移転を果たした事（一八八六年八月二七日、タイラー福音会から分離したグループがストージの協力を得て基督教青年会を設立―吉田）、そして毎月家賃四七ドル五〇セントを日本人自身で支出している他、年間一二三ドル九〇セントを集めクリスマス祝会や諸雑費（椅子、聖書、讃美歌、書籍、その他購入）にあてている事。ストージと通訳へのわずかばかりの人件費を除いては、この青年達はまるっきり財政援助を受けていないのに、伝道成果は着実にあがっている事。だから「私はボードが管轄しているミッション地域でこれほど少ない支出ですばらしい結果を生んでいるところが果たしてあるのかどうか全く疑ってしまう」。この町の日本人人口は増加しており、伝道局が専任者を任命してくれることを心から願っていると報じている。

ストージは外国伝道局の日本人伝道に対する姿勢に変化が起こらないので、引き続き日本人伝道の重要性を様々な形で訴えた。次の書簡（Sturge's Letter to Ellinwood, May 14, 1887）にもその一例が見られる。

> 昨年日本人伝道のために伝道局が支払った経費は六〇〇ドル以下である。これはもちろん我々への援助の大部分がイギリスの叔父から出ているためである。次年度も叔父が援助してくれるかどうかわからない。我々はひじょうに日本人の子供達になじんで

来て日本人伝道を放棄する事がむずかしくなった。

数ヵ月前、伝道局幹事エリンウッドに対して我々の契約期間満了後もここに留まるべきであるというのが伝道局の意志であるのかどうか問い合わせてみたが、はっきりとした返答がない。幹事は我々が当地に留まるべきであると言ってくれてはいないが、我々が一生懸命やってきた仕事を辞任するのは残念であると返事をしてきた。我々としては自分の生涯をかけた事業を離れようとは思っていないし、状況によって強いられる事がない限りそうするつもりはない。私の妻は体が丈夫でないし、現段階で彼女が外国のフィールドに出るのは賢明であるとは決して思えないし、私はしばしば異教の地で再び共に働く事が決して恩典とはならないだろうと考えている。

こうした状況にあって我々にとって最善のことは、日本人伝道は放棄しないという伝道局の承認をもらって、自分達が行ってきた仕事を続ける事である。（波線筆者）

ストージは日本人伝道に生涯をかける決心をし、在任期間の延長を伝道局に申し出た。最初の契約期間を特定する資料が被閲できないので、彼の任期そのものを確かめることは出来ない。この時彼は妻の健康状態もあってもう海外に赴任する道を模索することは考えていなかった。ストージが日本人伝道を継続するためには叔父の財政援助でもっている現在の不安定な状況を改め、伝道局が財政的にも制度的にも保障する地位を彼自身が確保しなければならなかった。[57]

ストージの決心に対して伝道局はどのように対応したのであろうか。ストージの書簡（Sturge's Letter to Ellinwood, November 3, 1887）でわかることは、伝道局は日本人伝道に関心がないわけではない事、そしてこの事業は特別の寄付で賄われるべき事を知らせてきたことである。[58] 事実一八八七年九月二一日のボード会議でストージの日本人伝道問題が取り上げられ、[59] 昨年と同一の予算で本年度も彼を日本人伝道のために雇用し、エリンウッドが彼を支援する財源を見つけるということが決まった。ストージは一応納得したが、同書簡（November 3, 1887）で、どうし

て伝道局は日本人伝道に殆ど関心を示さないのか、事業は非常に進んでおり、中国人伝道に出費されている年間総額と比べればちっぽけな費用であると疑問を投げかけている。彼はこの書簡であまり将来性がなく成果も上がってない中国人伝道に出費するお金があるのならば、希望のもてる日本人伝道にもっと援助するよう要求し、同時に長老派の不熱心さへの苛立ちを表明した。

ストージは突然一八八九年三月七日付で日本人伝道辞任を伝道局に申し出て、三月一八日に許可された。[60] ストージが辞任した理由については、「桑港通信　在米国桑港一信徒」（『基督教新聞』一八九〇年二月一四日）に病気療養と医術研究を兼ねてドイツに留学するためであったと報じられている。[61] ストージの仕事を引き継ぐために当時プリンストン神学校で学んでいた服部綾雄牧師が赴任することになった。[62] しかし当然推測できる最大の理由は、ストージを雇うだけの財源を伝道局が確保できなかったことであった。伝道局はストージを日本人伝道に任命した当初から財源が充分まわせないことを知らせていた。伝道局幹事エリンウッドの書簡（Ellinwood's Letter to Sturge, October 12, 1886）では、昨年から今年にかけて伝道局は六～七万ドル収入が少ないので、状況が改善されるまで少額で働いて欲しいと述べている。事実この前年の段階でストージの年俸は当初契約の三〇〇ドルから二〇〇ドルに減額されてしまっていたようである。[63] そして窮迫した財政は改善されることはなかった。実際伝道局会計報告（**表2**）によると、一八八九年度の段階で約四四、七〇〇ドル、一八九〇年度に約六〇、二〇〇ドルの赤字があった。

"The Foreign Board and the Synod"（*Occident*, December 3, 1890）はこの間のいきさつを説明している。太平洋岸地方年会（Synod）は一八九〇年一〇月六日付で、カリフォルニアの中国人及び日本人伝道の拡張の必要を伴う支出の増加を外国伝道局に対して要求する「覚え書き」を決議し、伝道局に提出した。実際外国伝道局の支出額を見ると一八八九年度から九〇年度にかけて六〇〇ドルしか増額がなかった（**表2**参照）。それに対して伝道局は同年

一一月一七日の会合で、中国人伝道について伝道局への寄付が増えない限りはこれ以上支出の増額は不可能な事、日本人伝道についても「本年初めに重い借金をかかえ、銀の交換率が混乱していることにかんがみ、そして特に外国伝道への諸教会の寄付が過去二年間にわたって年間平均五万ドル以上も減少しているという残念な事実を考慮して」、伝道局はどのような方向にも日本人伝道を拡張できない。しかし早い時期に現在の収入から日本人伝道を拡張するために実質的な財源を確保したい、と決議した。ストージが一八八九年に本人が好むと好まざるとにかかわらず日本人伝道を辞めざるを得なかったのは、この経緯から考えてやはり伝道局が財源を確保できなかったことによるのであろう。ストージは伝道局の不誠実さに愛想をつかして日本人伝道を諦める決心をした。彼にしてみれば、地元や伝道局の要請で不安定ながら日本人伝道に従事し、三三人で始めた日本人教会を二年余りで五七人へと増やし、青年会は七五人の会員を擁するまでに育てたのである。(64) 彼の熱意と成果に対するもっと正当な評価があってしかるべしであった。

タイ伝道

ストージの日本人学校教師赴任と辞任の経緯を見ると、彼が極めて烈しい性格で常に伝道局のやり方に対して批判的であったかのように映ってしまう。しかしそうさせたのは過重な責務をストージに課した伝道局、地元教会、中国人伝道部であった。というのも彼の最初の赴任地であったタイではごく普通の医療宣教師であり、少し熱しやすいタイプではあったが、伝道に対する強い使命感を持っており、伝道局に対しても批判的な姿勢を示すことはなかった。(65)

ストージが長老教会外国伝道局医療宣教師としてタイに派遣された頃、長老派のタイ伝道はバンコック（一八四〇年開始）とペチャブリ（Petchaburi, 一八六一年開始）の二箇所の拠点を持ち、四教会、一九五人の教会員、少年少女

のための寄宿学校生徒四七人、全日制学校生徒一七四人、日曜学校生徒二一三人、タイ人牧師四人、及び宣教師・教師一一人の教勢をもつ伝道地であった。[66] ストージは一八八一年にペチャブリに赴任し、専ら医療伝道を行った。彼の伝道局宛個人報告（Personal Report, April 14, 1881）によると、過去五ヵ月間で七〇〇人以上の患者を診察したこと、タイ人の患者は病気を治したいので彼のところにやって来るが福音には関心を示さない事などを報告している。[67]

ストージは医療にしか興味を示さないタイ人たちへの伝道をどのように効果的にするか考えた末、病院の設立を思い立った。同報告で彼はタイには病院も診療所もないことをあげ、病院の必要性を訴えている。一八八一年にアニーと結婚し、彼はコレラやマラリアに苦しむタイの人々のための医療活動に専心した。彼のタイ赴任最初の医療報告書（Sturge's Petchaburi Medical Report for the Mission Ending October 1, 1881）は、アジア・コレラがタイを襲い多くの死者が出、特に教会員の中で三二人が二期の患者でそのうち五人が亡くなった、とある。彼は赴任後一年少しで一、五四八人の患者を診ることで、医療が単に患者の苦しみを除去するだけでなく、伝道事業にも効果がある事を実感した。同報告書で病院に付いてふれ、その計画が実現可能であると訴えた。その根拠として中国広東にある病院を引き合いに出している。広東では当地の外国人居住者が伝道活動には無関心で献金をしないが、病院のためには喜んで寄付をしてくれている。少額の寄付で多くの患者を救えることを知ればアメリカ本国でも病院のために数千ドルの寄付が集まるに違いない。広東の病院での一ドルはアメリカの同一規模の病院の四〇ドルに相当するほど値打ちがある、と訴えている。ストージは、病院設立の目的は遠隔地の患者を一カ所に集め教化し、健康が回復したら故郷に福音を持ち帰ってもらうものであり、病院設立には一、〇〇〇ドルかかるがすでに半分を集めたと書簡に記している。[68] 彼にとって医療伝道とは福音の説教を補完するものであり、神学的訓練を受けた伝道者以上に「異教徒」にイエスの愛を伝えうる方法であった。[69] 伝道者にとって教会が福音を伝える場であるとすれば、ストージにとって病院がそ

れに代わるものであった。彼はペチャブリに私財を投じて病院を建設し、その成果として一〇人が病院から受洗しふたりの医学生が生まれた。[70] タイ人のクリスチャンの医者を育てる事はタイ人の宣教師を育てるのと同じくらい重要であると彼は考えていた。一八八三年の彼の医療報告（Sturge's Annual Report, Medical Work, December 31, 1883）では一五カ月間に五、七二二人の患者が病院に登録し、投薬は一一、一七六回、外診は一、七四五回に及んだという。[71] 一八八二年一〇月赴任以来ペチャブリの伝道活動を支え、ストージからも信任の厚かったダンラップ（Eugine P. Dunlap）は彼の病院を「偏見を除去し、目覚めさせ、人々の信任を得る重要な機関である」という高い評価を年会報告の中で下している。[72]

医療伝道の傍らストージ夫妻は学校教育にも関わった。[73] 彼の年会報告（Sturge's Annual Report, December 31, 1884）には毎日一六～二五人が出席しており、学生の半分が英語を学び聖書を暗唱したり、日曜礼拝後に日曜学校を行っている、とある。夫人も学校を自宅で開き、二五人の生徒を擁し（寄宿生一二人、全日生一三人）、そのうちから三人が受洗した。[74]

しかしストージ夫妻もコレラに侵されたため、一八八五年に療養のためにタイを離れ、帰国の途についた。夫人はマラリヤが原因で心臓病を患い、帰国前三年間亜熱帯の気候に悩まされ、病状は悪化する一方であった。夫人をひとりで帰国させるのは危険であるから、ストージもタイ伝道を引き揚げて夫妻で帰国することになった。[75] ストージは書簡（Sturge's Letter to PBFM, April 15, 1885）で以下のようにその心中を述べている。生涯を伝道活動に捧げることをボードに申し出たのに五年間で伝道を断念することは残念であるが、妻の状況から考えてタイへの再赴任は賢明でない。もしボードが認め、妻が健康を回復すれば北中国か朝鮮、とくに後者に赴任したい。年齢的にはまだ二十九歳であるからいまからでも外国語は学べるし、タイでの伝道経験は他の伝道地でも生かせる。もし再び外国の伝道地

で働く事が神の意思ではないのならば本国で最善を尽くす、と。病院にとってはストージ夫妻の帰国は大きな痛手となったが、ダンラップの指導下でふたりの医学生が非常に努力し、夫人の学校はニールソン（Jannie R. Neilson）が面倒を見る事になった。[76]

最初の赴任地でストージは医療宣教師として病院を建てるなど十分な成果をあげ、伝道局に対しても揺るがない忠誠心を示していた。そのストージがサンフランシスコの日本人伝道ではあれだけ伝道局に批判的になったということから、いかに彼が伝道局の十分な理解を得られず悪戦苦闘していたかが分かる。彼を理解、支援をしなかった点ではカリフォルニアの地元教会はもっとひどかった。

三、一八九七年伝道局決議

ストージの再赴任

一八九〇年以降中国人に代わるカリフォルニア農業に必要な労働力として日本人労働者が大量に流入し、一九〇〇年代になると日本人はカリフォルニア農業、各産業に進出し、主要な労働力源となっていった。この時期、日本人はアメリカ西部の経済発展にあわせて中・南カリフォルニア、ワシントン州、コロラド州等へと拡散していき、各地に拠点となる日本人町を形成した。

ストージは一八九一年二月二四日に再度日本人伝道の招聘を受けて、一八九一年五月一日にサンフランシスコに帰任する事になった。[77] ボード議事録（PBFM, *Minutes*, February 2, 1891）によると、ストージのサンフランシスコ日本人伝道宣教師としての任命は暫定的なものであり、日本語ができる宣教師が見つかればすぐにでも交替し、本人

が望むならば医療宣教師として外国の伝道地に派遣するという条件がついていた。しかしストージは日本語ができないにもかかわらず、彼以上の適任者はついに現れなかった。

一八九〇年代になって在米日本人人口は減少するどころか増加する一方であり、教派として彼らに対する伝道活動を一切やらずにおくことは到底出来ない状況になっていた。ではなぜまたストージを任命したのか。*The Church at Home and Abroad* (December 1889) 掲載の "Foreign Mission Notes" に伝道局の日本人伝道に関する見解の変化を見ることができる。つまり太平洋岸の日本人伝道が長老派の日本伝道を発展させるために極めて重要であること、サンフランシスコ近辺に三、〇〇〇人を越す日本人がいるのにキリスト教伝道の対象になっているのは高々二五〇人程度である事、放っておくと日本人達が当地の誘惑を受けて「放蕩息子」のようになる危険性があるので、日本人伝道のためにもっと財政援助すべきである、などである。だからといって新たに伝道者を捜すような余裕はなかった。これまで在米日本人伝道に従事していたのはストージであり、彼は中途半端な任命であったにもかかわらず、成果をあげていた。現場の判断で、ストージ以外に適任者はいなかった。先稿で述べたように、ストージが日本人伝道を辞めてドイツに旅立ったときに、日本人達は自分の両親を亡くしたかのように悲しんだし、当時日本人教会の役員会議長を務めていたケールはストージほどの働きを日本人伝道で行える人は他にないという結論を下していた。(78) 一八九〇年一〇月に太平洋岸地方年会が伝道局に対して中国人・日本人伝道への予算増額を要求したのにはこうした背景があった。実際伝道局会計報告（**表2**）によると、一八九一年度は前年度より二、六〇〇ドル、九二年度には更に二、七〇〇ドル増額されている。

在米日本人伝道の成果が日本伝道の活力となって実を結ぶという考え方は公認されたものであったかどうかは別として、日本人伝道開始当初から存在していた。長老派中国人伝道局宣教師は早くからアメリカに渡ってきて長老派の

伝道に連なる日本人の多くが自派の外国伝道局の成果とも言うべき日本の長老教会員である事、だから彼らがアメリカにいる間は彼らを信仰的に養い、帰国後日本伝道に貢献できる働き手にするのは義務である、という考えを示していた。この考え方は伝道局年会報告（PBFM, AR, 1890, pp. 71f.）にも出されている。この報告では、最近来航した蒸気船から二二人の日本人が日本人ミッションを訪れ、そのうち一一人が長老教会の推薦状を持っていたと述べ、日本の長老教会員が渡米する際にサンフランシスコの日本人ミッションを目指して渡ってきてその世話になっていると報じている。そして、

> これらの若者は日本の教会で最も活気のある人々の代表である。サンフランシスコのミッションが影響を与えていなかったら、彼らはクリスチャンから何の親交も激励も受けないであろう。彼らからたびたびもらう苦情は、彼らのキリスト教国アメリカに対する第一印象が驚きであり衝撃であり、無関心、疑惑、そして最終的に背教につながるような事が多くあり、ひじょうに危険であることである。一方、もし彼らが心からの親交を受ければ、彼らのために伝道できるこの特殊な好ましい機会は適度に実を結び、どのような仕事に従事しようと彼らは実質上の宣教師〈virtual missionary〉として送り出されることになる。（波線筆者）

と述べている。つまり折角アメリカ人宣教師によってクリスチャンとなり日本のキリスト教の成長を将来担うべき人材が、世俗化しキリスト教の指導的影響力が薄れていくアメリカに失望してキリスト教を捨てる前に、ミッションが精神的にも物質的にも彼らによい影響を及ぼし、「宣教師」として日本の教化を担える戦力にして送り返す義務があるというのである。サンフランシスコの日本人長老、美以両教会の会員転入出表が示すことは（**表3**参照）、当時の当港の日本人教会はアメリカ社会の受け入れ窓口としての機能を果たしており、日本のクリスチャンが在米日本人教会に転入してきており、こうした「有能な」日本人クリスチャンへの義務を果たすという観点から彼等への伝道は重要な課題であったと思われる。しかし転出者については多くが米国内の教会に対してであり、日本へのそれは極めて

少ない。日本に宣教師を送り出す機能を当時の在米日本人教会が持っていたかどうかについては、数の点でははなはだ疑問である。ただ少数でも質の高い日本人クリスチャンを祖国に送り返すというのならば別である。

教派本部や伝道局のこうした虫が良すぎるともいえる方針転換に感情的抵抗がなかったわけではないだろうが、ストージはあらためてその多忙な任についた。彼は日本人伝道再赴任にあたって従来から言われてきた考え方を踏襲して積極的に自らが外国伝道宣教師として果たすべき役割、即ち在米日本人伝道がいかに外国伝道として有益であるかを根拠づけていった。彼は "Our Pacific Coast Mission" (*The Church at Home and Abroad*, July 1892) で「我々は種を蒔き水をやり、しかしすばらしい結果は太平洋の向こう岸（日本—吉田）に求められるべきである。我々の世話を受ける日本人の大半の目的は、お金を貯める事よりも教育を受ける事であり、その目標を達成すると彼らは美しい島の家（故郷—吉田）に帰る。我々は常に少年達が離れていくのを残念に思っているが、我々は彼らの多くが主の大目的を推進するために帰国する事を喜んでいる」（波線筆者）と述べた。その例として彼は、このミッションにかつて連なっていた日本人で、帰国後医者になった者、大阪の農学校の教授をしている者、ホノルルで通訳をしている者、サンフランシスコ神学院で勉強している者などをあげた。(79)

一八九七年外国伝道局決議

伝道局はストージを再赴任させておきながら、相変わらず国内のアジア人伝道については消極的であり、出来ることなら責任を回避し、地元教会に委ねたいと考えていた。伝道局は一八九七年一二月二〇日の会合で、カリフォルニアの中国人及び日本人への伝道を一八九八年一一月一日付をもって廃止するという決議をした。ボード議事録によると（PBFM, *Minutes*, December 20, 1897）、当日の会議に提出された在米中国人、日本人伝道の移管に関する答申

は以下の通りであった。

この問題を慎重に検討した結果、委員会は実際問題として外国伝道局の担っている在米中国人、日本人伝道事業の大部分を他の長老派の機関に移管することを勧告する。その理由は以下の通りである。

一、事実上アメリカ本国の多様な形態のキリスト教伝道は内国伝道の指揮下にある機関に帰属すべきである。在米中国人、日本人伝道は内国の中会の範囲内にあり、それ故中会の管理下にあるべきである。外国伝道地では伝道局が地域の指揮をする責任がある。しかし在米中国人、日本人伝道の伝道者は各地に散らばっており、長老政治による有利点もないし、チェックも充分行き届いていない。この地域では各個人やグループが別々に行動しており、他の長老政治による制度化した組織と何等関係を持っていない。そしてただ伝道局のみが修正の余地を持っているが、中会や地域の教会ができるほどの細部にわたる面倒を見ることができない。さらにもしこの伝道事業が直接関係を持つ事になれば、そうした中会や教会はこの伝道事業にひじょうに関心を示すに違いない。結果として外国伝道局との関係が切れても、そのことがむしろ有利に働く事になる。

二、最後に、外国伝道地での要求が高まっている一方でアメリカ本国の諸教会の寄付が減少しているという状況がますますこの考えを強め、決断を早めている。外国伝道の展望が今ほど明るい事はかつてなかった。驚くべき変化が多くの国で起こっている。特にアフリカ、中国、朝鮮、タイ、ラオスである。あらゆるクリスチャンの指導者達はこうした大量の人々への前進運動を命じる事を検討している。しかし伝道局は固定した政策をとることを強いられてきた。そしていくつかの伝道地に付いては引き揚げを余儀なくされた。

我々は学校を閉鎖したり病院の機能を低下させたり現地人の説教者や教師を解雇したまま放ったらかしにし続けるべきではない。一方で同時に我々は直接隣接している少数の中国人、日本人への伝道を年間二五、〇〇〇ドルに拡大している（場合によっては数百の教会の中には会員数や財源が豊かなものもある）。現在外国伝道局がこの伝道事業のために使っている資金は戦術上重要な場所をより強化するために回されるか又は三、〇〇〇万人が住むアジア（現在ほとんど全く福音の利益を蒙っていない）に新しい伝道地を開くために使用されるべきである。また我々はアメリカの中国人、日本人が階層として高い報酬を得、例外的に勤勉で倹約家であり、海を隔てた祖国の人々よりもはるかに自らの教会を支える能力があり、英語の教育に金を払える（彼らは英語教育をより有利な仕事をより容易に得る事ができるという理由で我々に求める）ことを知っている。ある町では、特にフィラデルフィアでは中国人への伝道が関心を持つ地方教会の合同事業としてうまくいっている。なぜこうしたことが他の地域で

もできないのか。

委員会はそれ故一八九八年一一月一日をもって事実上伝道局が

一、カリフォルニアでは（a）サンフランシスコを除いて中国人、日本人への全ての伝道事業への支援を地域の機関に委ねる。（b）サンフランシスコでの伝道事業の予算を大きく削減する。（c）しかしひじょうな関心が集中しており、しかも調整に時間のかかることを考慮して、現在のところ中国人女性の救済ホーム、I・M・コンディット夫妻の中国人伝道活動、E・A・ストージ夫妻の日本人伝道事業はそのままにしておく。

（下略）

ストージの伝道については引き続き伝道局から財政援助があることにはなっているが、この決議の内容たるや伝道局による在米アジア人伝道に対する明白な責任放棄、地方中会への責任転嫁であった。伝道局は米国内のアジア人伝道が外国伝道であり、必然的に自らが果たすべき責任であるという考えにこの時点では立っていなかった。伝道局が本来担うべき海外の伝道地に十分な財源を回すという大義のために、まず国内のアジア人伝道の支出を切りたいのであった。

カリフォルニア地元教会の反応

この決議に対してカリフォルニアの長老派クリスチャンは三つの点でこの決議を批判した。“A Coming Disaster”（*Occident*, April 14, 1898）によると、まず、この決議は最も重要で将来性のある事業に大きな損害をもたらし、アメリカの教会への信頼を裏切る事になる。問題は外国語を学び、大きな費用を投じて宣教師を外国に派遣することで、英語によって伝道でき、帰国後喜んで同胞に御言葉を伝えてくれそうな日本人や中国人にアメリカで福音を伝える事を断念すべきかどうかであり、全くこの決議は愚かな経済感覚である。もし伝道局がこの政策を主張するなら、

摂理的な義務を無視することになるばかりか、日本や中国での伝道をも損なうことにもなる。次に、国内でも中国人や日本人への伝道は内国伝道局の仕事であると思われるが、内国伝道局はすでに仕事過剰であり財政的にも厳しいので、これ以上仕事を増やすことはできない。彼らの祖国はアメリカではない。彼らは祖国の伝道の重要な要員である事を運命付けられているのである。だから彼らのために為すべき事は、この点を考慮して彼らの祖国との関わりにおいて行い、彼らの祖国で伝道している組織によって伝道が遂行されるべきである。最後に、カリフォルニアの中国人、日本人への伝道は現地の教会や中会が担うべきものでない。カリフォルニアは中国人を呼んだわけでもないのに、カリフォルニアで中国人排斥が起こると他の州から非難され、中国人排斥法に関しても長老派総会で批判された。そして東部の連中は「異教徒」に対して門戸を開放すべきであると要求するが、その精神があるのならばこれらの「異教徒」への伝道のためにお金を寄付すべきである。これは地方の教会の任務ではなく教派全体が担うべき任務である。もしこれが外国伝道局の仕事でないとすれば、外国伝道局が何のためにあるのか当惑してしまう。すでに当州の一中会はこの決議に反対を表明しているが、他の中会もこれを見習い反対し、伝道局に彼らへの伝道に責任をとってもらうようにすべきであると言っている。

地方中会からのこの猛反対によって、外国伝道局は四月一八日の会合で全会一致で提案を撤回し、サンフランシスコで例外的に事業削減を行わずに現状維持で、継続して伝道局の管轄で伝道を続ける事を表明した。(80)

なぜカリフォルニアの教会がここまで執拗に中国人、日本人伝道の責任を回避しようとしたのだろうか。推測できることは、ハワード長老教会がすでにそうであったように、地元には在米アジア人伝道が外国伝道の一部であるとしてその責任を体よく外国伝道局に委任したのに今更地元の責任を追及されても困るという思いがあったことである。この点についてはカリフォルニアからの本部の方針への反論の中にも伺える。次にサンフランシスコがアジア人排斥

運動の発祥の地であり一大拠点であったことである。日本人排斥の声はすでに一八八〇年代に当市で上がっており、一八八九年には当市の『レポート』紙が、中国人のケースを日本人にも当てはめ、日本人労働者と地元労働者との対立が大きくなる前に善後策を取るべき事を訴えている。一八九三年には日本人学童排斥事件が勃発していた。本部の方針へのカリフォルニア側の反論の中でも、招かれざるアジア人「異教徒」の大量の流入で頭を抱えているのに、中国人排斥についての責任まで同派内から追求されるのでは全くやりきれない、その上今になってアジア人伝道を押しつけられたのではたまらない、という地元の感情が表れている。地元で「厄介者」になっているアジア人への伝道責任を外国伝道局にうまくなすりつけたのに、今更こちらに再転嫁してほしくない、という思いである。年代は下るが、中国人伝道部総理J・ラフリン（J. H. Laughlin）は“The Asiatic Problem in the United States”（*The Assembly Herald*, August 1911）で、在米アジア人伝道がこれまで大きな成果を上げられなかった理由として、西部の教会の大多数がアジア人のアメリカ在住を全く承認しなかったことと被伝道者との言葉の壁をあげている。特に前者については、この理由が南部の教会が黒人の面倒を見ず、西部の教会がネイティブズ伝道に尽力しなかった理由に通じる、と述べている。人種差別がアジア人伝道の障害になっていたのであった。

在米日本人伝道があくまで外国伝道であるという考えは誰がこの伝道事業を管轄するかという問題でもある。外国伝道局が当然その責任を担うべきであるという考えはサンフランシスコ中会だけでなく現場の宣教師の意見でもあった。一九〇七年五月三日の伝道局ボード会議で在米アジア人伝道を内国伝道局に移管する問題が討議された。[81] 伝道局執行部は、この移管問題に付いて多くの太平洋岸地域の人々より反対があったので「現状ではこのような移管は得策でない」という見解を示し、票決した。反対意見を提出したのは Mrs. H. B. Pinney（四月九日付書簡）、Shanghai[sic]（三月二九日付書簡）、Dr. John Wills Baer（三月二八日付書簡）、Dr. E. A. Sturge（三月二九日付書簡）、Rev. Dr. S. A.

Moffett（九月二四日付書簡）、Rev. D. E. Potter（四月八日付書簡）、Dr. Warren H. Landon（四月二〇日付書簡）であった。結局外国伝道局の願いは一九二二年に在米アジア人伝道が外国伝道局から内国伝道局に移管することでようやく実現するに至った。

排日問題

地元教会の日本人伝道に対する態度を大きく規定するものとして前述のように人種問題があった。ストージは一八八六年日本人伝道に赴任した当初からアメリカ西部社会の環境が決して伝道にとってよい影響を及ぼさないことを指摘してきた。ストージの西部の「キリスト教社会」への不信感は根深かった。この町で彼は世俗化し、退廃したアメリカ西部の典型的な社会を見た。彼のこの町への印象は彼が日本人伝道に一種の使命感を持つに至るひとつの契機ともなった。ストージ書簡（Sturge's Letter to Ellinwood, May 14, 1887, 前掲）では、「……我々の所にやってくるほとんどの日本人は母国でキリスト教について何も聞いた事がない人々であり、この世界の他の町より恐らく青年への誘惑の多いこの町（サンフランシスコ—吉田）で、もし我々の幾人かが日本人に関心を示し、危ない事を警告し善い事を教えない限り、キリスト教を学ぶ事はないのではないかと心配している」と報じている。[82] たとえ日本人の能力、適応力がどれだけ優れていても、受け入れ側のホスト社会が堕落し悪影響を及ぼすのでは逆効果である。事実多くの日本人がすでに飲酒や賭博などの習慣に毒されつつあり、その悪影響は日本にまで及んでいる。これを止めさせられるのはストージ自身の行っているキリスト教伝道のみであるというのである。ストージは "Mission Work Among Japanese in America-Its Influence in Japan"（*The Church at Home and Abroad*, July 1894）で、

我々の食物、衣服、作法、習慣はすべて受容されキリスト教の影響を受けた彼ら（日本人―吉田）は我々の宗教を容易に受け入れる。もし我々が告白する通りの本当のキリスト教国民で有るならば、我々は間違いなくこれらの知的な若いアジア人の大半を祖国に送り返して、彼らの力によってキリスト教にとって有利になるような影響を及ぼす事ができる。しかし悲しいかな、若者は決してよい感化を与えない家に在留している。米国のどの町よりもたぶん開放的に悪が横行しているサンフランシスコに住む事で、彼らは悪行についてひじょうに多くを学んでしまっている。

我々のキリスト教ミッションこそが、どこにでも見る事が出来る悪の影響に対抗して全力を出し切らなければならないのではないか。さもないと当地に来る大半の人々は全く堕落してしまう。アメリカ人の真似をして当地の日本人は行きつけのビリヤード・テーブルを持つサローンを少なくともひとつ持っている。また彼らは飲酒や賭博をするクラブにも出入りしている。不運にもアメリカで学んだ多くの邪悪な習慣が日本に移入され、当地の伝道事業を害している。（波線筆者）

と報じている。[83]

ストージのカリフォルニア社会との対決姿勢は排日運動の盛り上がりとともに強まっていった。彼の一九〇六年の日本人学童隔離事件、マウント・ハーモンでの会議、一九一三年及び一九二〇年の外国人土地法に対する活動についてはすでに述べた。[84] 問題は地元長老教会の対応である。ストージが排日事件や土地法に対して抗議したからといって彼の主張が必ずしも長老教会全体を代弁していたわけではない。一九〇六年の学童隔離問題に対して一九〇六年一〇月一八日オークランドで開催されていた加州宗教大会が教育局を「反アメリカ的」、「不公平」、「非キリスト教的」等と批判する決議をおこなった。大会にこの決議案を提出したのはストージ、ジョンソンであり、彼等の努力無しに全会一致のこの決議は生まれ得なかった。二人はキリスト教の原則である隣人愛に反し、キリスト教国アメリカの威信を傷つける行為を批判したのである。一九〇七年一月二四月～二七日マウント・ハーモンでの東洋人問題の会議には長老派から最も多い出席者があった。H・H・ベル（Hugh H. Bell, サンフランシスコ第一合同長老教会牧師）、W・H・ランドン（Waren H. Landon, サンフランシスコ神学院学長）、J・H・ラフリン（J. H. Laughlin, 長老派中国人伝

道部総理)、E・A・ストージ、L・T・ホワイト(Lynn T. White, サンフランシスコ聖パウロ長老教会牧師)等であった。会議では正義、公平、平等の原則で国際関係、移民問題に望む趣旨の決議をおこなった。長老派内にストージに同調できるリベラル勢力が存在していることを示している。

しかしストージのカリフォルニア・キリスト教界に対する不信感は一九一〇年代にも表明されている。彼は"Presbyterian Opportunity in the West-V. On Japanese Problem" (*Pacific Presbyterian*, May 9, 1912; *The Pacific*, June 19, 1912) で、「日本人は優しさに対して敏感であり、もし我々が神が父であり人間が皆兄弟姉妹であると信じ、告白することに誠実であるならば日本人をイエスに導くことは比較的たやすい。カリフォルニアのこの地ほど伝道地として優れた場所は他にない。もしプロテスタントの諸派に関わる我々クリスチャンが太平洋の向こう側から来る外国人を仲間として歓迎してくれるのなら、この地域で我々の教派が日本人伝道を長く続ける必要は無いかも知れない」と述べている。言い換えればカリフォルニアのクリスチャンはキリスト教の隣人愛を実践していないとストージは考えていたわけである。一九一三年の外国人土地法に対してはストージは一九一三年四月二一日サンフランシスコ市内長老教会牧師会でこの問題について動議を起こし、正義の名において州議会が日本人を差別する法律を制定しないことを内容とする請願書を満場一致で決議させ、上院議長に送付した。一九二〇年の外国人土地法に対してもストージはジョンソンと共にアメリカ人公正会議の抗議声明文に名を連ねていた。サンフランシスコでは中会が土地法反対の決議を行い外国伝道局に提出した。こうして見ていくと、長老派として排日動向に抗議するような決議を一応行っている点で当州の排日分子よりも親日的な姿勢を示していたと言えるかもしれないが、隣人愛の実践をなしえたというレベルのものでは決してなかった。ちなみに長老派が教派として排日問題に対する姿勢を表明したのは、一九二四年排日移民法制定に対して外国伝道局と総会の外国伝道実行委員会が遺憾の意を表明する決議を連邦政

府に送付した一件だけであった。結局ストージの努力無しには集団レベルでの決議を出すことはできなかった。こうした地元クリスチャンの日本人への無理解、非情さはストージをイライラさせる原因となり、孤立感を深めることになった。そもそも日本人伝道に着手したのは地元の教会であり、ストージや日本人伝道に対してもっと理解を示すべきであった。彼はキリスト教国のあるべき姿に反する現実のアメリカ社会への日本人の同化、アメリカ化は無意味なことであり、むしろ日本人自身がストージを通じてアメリカ社会の悪影響を受けずにキリスト教の真理を修得し、それを祖国の同胞に伝えてくれることに自らの伝道活動の意義を見出そうとしていた。

四、日本教化のための伝道・教育

伝道方針

一九〇〇年代にはアメリカの日本人人口に変化が生じ、これまでの書生中心から出稼ぎ移民労働者が大半を占めるようになった。一方日本人労働者も仕事を求めて地方に散らばり、各地に仏教会その他の日本人団体が設立された。ストージはこうした変化について伝道局年会報告（PBFM, AR, 1903, p. 357）で、日本人の増加に伴い社交団体もでき、そして多種多様な娯楽を提供するようになったので青年達がミッションから離れるようになった。また仏教徒がキリスト教会の活動に従って主だった都市にミッションホームを作り、非クリスチャンの日本人をすべてその寺の支持者であると公言している、と報じている。また、ほんの少数の日本人が太平洋岸に住む事で品性を向上している。サンフランシスコはアメリカの「坩堝」（smelting pot）と呼ばれており、坩堝に入ってくるあらゆる物が良い物を生み出すはずはない。我々のミッションに魅了され福音の感化を受ける日本人達は高められ、純化され、祖国に帰っ

て主のよしとする働きを支援してくれる。一方キリスト教の教えの感化を受けていない多くの人々はアメリカに来たときよりも品性を低下させて帰国している。外部環境の変化は日本人に悪影響を及ぼしているが、その中にあってストージによる伝道活動は本来の目的を立派に果たしている、とも報じている。一九〇〇年代の日本人社会の変化ではストージの伝道方針に何等の変更をもたらすことはなかった。伝道局年会報告（PBFM, AR, 1901, p. 312）で、ストージは「我々のミッションは砂糖精製所のようなものであり、外国から原料を受け取り、ある程度精製して日本を甘くするために送り返すのである」と述べている。[85]

紳士協約締結後、日本人移民の数は減少し、いわるゆる「写真結婚」に代表される女性人口が増加し、その結果として二世が急増した。いわゆる「定住時代」を迎えるのである。ストージもこの状況の変化に対応して、アメリカ社会の基盤を固めるために教派合同による日本人自給独立教会及び伝道局の設立を唱えるようになった。[86] 一九一〇年代になって日本人社会も「定住時代」にはいり、日本人の土地所有問題、同化問題、帰化問題が本格的に論じられるようになって、この矛盾もますます顕著になってきた。ストージは外国伝道宣教師として日本伝道との絡みで在米日本人伝道をとらえるという立場で、排日問題に対応しながら在米日本人伝道の発展、日本人教会の設立を計らなければならなかった。実態はともかく、時代状況の変化にも関わらず、ストージは外国伝道宣教師として一貫して在米日本人伝道を日本伝道への貢献という視点から取り組んだ。ストージは“Japanese and Chinese in California”（*The Pacific*, August 2, 1911）で「伝道地域は世界である。内国伝道と外国伝道は一体である。我々がアメリカをよりキリスト教的にするために働いた事は他の国々にも影響が及ぶ」と述べ、東洋人伝道のために伝道者を雇う資金を本部に求めた。[87]

ストージの考え方は一九二〇年代に入っても変わっていない。一九二一年の伝道局年会報告で（Report of Work

for the Japanese on the Pacific Coast, 1921）で彼は、「我々のところにいるよりも多くの日本人クリスチャンが帰国しているというのは今や我々の全教会とミッションの傾向である。アメリカでキリストに出会った日本人は日本の宣教の重要な担い手になった」と述べている。既述のようにストージは一九二〇年に総理辞任を申し入れたが、日本人クリスチャンからの熱烈な慰留によって思いとどまった。一九二二年に在米日本人伝道が外国伝道局から内国伝道局の管轄に移ったのを契機に彼は総理辞任を再度申し入れ、今回は受理をとりつけた。内国伝道局への移籍後も伝道活動を続けるよう再び請われたが彼は断っている。ストージは書簡（Sturge's Letter to Wheeler, June 6, 1922）の中で「私は内国伝道宣教師として新規の伝道活動を開始するのを躊躇して」おり、伝道局が本人の辞任願いを認めてくれる様求めている。私は「自分の名前がずっと外国伝道宣教師のリストにあることを望んでいる」と述べている。三〇年以上にわたって外国伝道宣教師として矛盾をかかえつつも日本人伝道を担い、名実共に相応の成果を挙げてきたという自負心をもつストージにしてみれば、教派の都合で日本人伝道の管轄が内国伝道に移ったのでストージも移籍して今後も従来通りの活動を続けて下さいというのはあまりに虫のいい、現場の苦労を踏みにじったものであった。

基督教青年会

プロテスタント諸派は初期の在留日本人の大半が西洋文明を学びにアメリカに来た書生や知識人であり、帰国後日本伝道に寄与できる事に着目して教育活動を展開した。キリスト教伝道と教育・啓蒙事業とは一体のものであった。ここでいう教育・啓蒙事業とは現地の公立学校ではなく諸派が伝道の一環として建てた教育施設を通じて行われるもののことである。ストージは一八八六年にサンフランシスコ長老教会の姉妹団体として基督教青年会を設立した。[88]

教育事業を重視するというのは中国人伝道ですでに行われていたことであった。[89] 中国人伝道では教育事業を行うにあたって、いわゆるＹＭＣＡに相当する組織が重要な役割を果たし、「幼学正道会」と呼んで中国人の多く住む街へ次々と設立展開させていった。[90] 日本人伝道でもＹＭＣＡ組織が教育事業上中心的な役割をはたし、タイラー福音会を前身とする日本人基督教青年会が長老派の伝道・教育活動の要となった。[91] オキシデンタル婦人外国伝道局が発行している機関誌で長老派の家庭向け出版物である *Occident* の "Japanese Young Men's Christian Association" (September 21, 1887) には、基督教青年会の目的は、

一、全能の主なる神を讃美すること。
二、クリスチャンの日本人を一つの共同体に繋げ、神を礼拝しない人々と分離して生活すること。
三、共に生き、お互いに助け合う信仰を強めること。
四、アメリカ人教師によって聖書と英語を学ぼうとする多くの人々に施設を提供すること。
五、キリスト教主義で日本人の若者を教育すること。

とある。この青年会はサンフランシスコ日本人長老教会の中心的な活動体となり、多くの同胞の教育に従事する母胎として重要な役割を果たした。同時にこの青年会はストージの活動基盤であり、彼は青年会を拠点にして日本人への教化をおこなっていった。[92]

日本人の増加に伴い青年会も規模を拡大し設備を充実させていった。一八八七年八月二七日に創立1週年の祝会を開き、図書館を設立している。[93] 会の活動規模が拡大するにつれて手狭になり、一八九二年八月一五日の臨時役員会で拡張移転を決め、伝道局の援助もあってかつて長老派の神学校として使用されていた建物（ヘイト街一二一番）を譲り受けて移転した。[94] 一八九三年度伝道局年会報告は会の様子を次のように報じている。[95] 新しい建物にはチャペル、社

交室、食堂、台所と、寄宿部屋が一六室があり、充分な設備を整えていた。会員数はこの時点で九七人となり、そのうちの活動的な会員は全て教会員でもある。その活動は青年キリスト教共励会（Young People's Christian Endeavor Societies）とまったく同じであり、日本語新聞、定期刊行物、数は少ないがアメリカの雑誌等を所蔵する図書室、運動及び精神鍛錬のクラスを持ち、二〇ページの無料の月刊誌を自費で出版している。また夜学校は三七人の出席者があり、そのうち九人はドイツ語のクラス、約一二人が上級英語クラス、残りの生徒は一～三級の英語読本を勉強している。毎夜九時半から一〇時まで祈禱会が開かれ、多くの生徒が出席している、としている。[96]

当時の青年会の広範な活動は「桑港日本人基督教徒青年会」（『基督教新聞』一八九七年九月一〇日）にも以下のように要約されている。[97]

同会は主として霊体知徳の教育を図り内は基督教徒の一致団結を固し外は在来一般同胞と協力して品性を養ひ徳義を高め以て大に本邦人士の名誉を顕揚するを以て目的とし今同会か会員等に享有せしむる利便の一般を記せば下の如しといふ○教育部　日本人長老教会伝道長医学士哲学博士「スタージ」氏其他本邦人数名在り開発的教育法を以て当地中学及び商業学校等に入の備へに適切なる学科を教授す○体育部　本邦人が欧米人に比して体格の劣る処昭々たるゆへ此部を設けて其欠点を満さんが為め撃剣道具等をを備へ以て練武の便に供す○新聞雑誌縦覧所及書籍館　は廣潔にして数十人を容るゝに足り欧米の新聞雑誌其他和漢英の書籍数千部を有す○文学会及学術講談会　文学会は会員の文学上及時事問題の討論演舌其他の演習を為し講談会は毎週或は毎月諸専門大家を聘し学術及実業上の有益なる講説を為さしむ○止宿室　同会の上層には五個の止宿室あり各室皆完美なる斉粛を旨とせり○其他音楽部、集会部、労働周旋部、貯蓄部　等あり各其部門に従つて会員の益を計れり……

青年会が知徳体に霊を含む総合的な教育的施設を完備していたころがわかる。一八九四年にはサクラメント街支会でも教育クラスを開始し、英語、ドイツ語、ラテン語、科学、歴史などを教えた。[98] 青年会の会員数の変化を見ると、相当数の日本人青年が利用していた事がわかる。以下該当年度の外国伝道局年会報告（PBFM, AR, 1890-1911）によ

って人数を調べると、七五人（一八九〇年）、九〇人（一八九二年）、九七人（一八九三年）、一〇〇人（一八九四、九五、九七年）、九六人（一八九八年）、一〇六人（一八九九年）、一〇五人（一九〇一年）、一四〇人（一九〇九年）、一〇〇人（一九一〇年）、一三〇人（一九一一年）となる。[99]

青年会の教化・啓蒙活動は演説会及び文学会や学術講演会を定期的に催し、信仰、哲学、保険衛生、国際政治、移民問題、その他幅広いテーマで同胞に奉仕した。また雑誌の発刊など出版活動も行い、一八九二年より謄写版で機関誌を定期刊行したという。『福音新報』（一八九二年六月二四日）掲載の「在桑港日本人青年会」は発刊の「主意」をう「吾人各自目的を抱時し此土に渡航せしに間せず往々失敗に陥り放逸に流るゝの弊あり必竟するに吾人を慰安し吾人を奨励し吾人に歓娯を與ふるの道なきに由る然れば即ち吾人は此報告により一は以て高尚の志想を養成し他は以て会衆を振発せしむるに在り」と述べている。この機関誌がどのような内容であり、何部印刷されていたのか、まだ実物を被閲できないでいる。その後青年会では日本語新聞も発行することになり、一八九八年一一月三日『北米日報』と題して第一号が出版された。[100]

教育方針

ストージの日本人への教化活動のはじまりは日本人夜学校の教師からであった。しかしそれだけではなくサンフランシスコ日本人長老教会の長老としてまた説教者として活躍した。一八八七年にはストージはケールと二人で日本人教会を切り盛りし、学校、祈禱会、日曜学校、日曜礼拝、聖書研究会など一手に引き受けていた。また医学を志す学生のために特別セミナーも行った。ストージ夫人も学校で教えた。[101]

彼の "The Japanese in California" (*The Church at Home and Abroad*, July 1896) はサンフランシスコで

の日本人への教育活動においてピューリタン的エートスを身につけさせることが重要であるとして以下のように語っている。

キリスト教の影響下にない日本人は西洋文明と密に接する事で疑いなくいくらか利点を引き出しているが、全体として我々の内をさ迷う事で良い事よりも傷ついており、大半のカリフォルニア住民は不運にも日本人にとって模範として役立たない。こうした若者は生来の上品さの多くを失い、変わりに無遠慮となり、西洋的なやり方として決してこのことで進歩したとはいえない。最大の危機はしかし自由の不適切な作用である。彼らは故郷や拘束よりはるかに離れ、「自由の国」で真の自由を誤って理解しており、彼らの多くは堕落し時間を無駄にし、罪ある目的にお金を浪費している……しかしクリスチャンになった人々はお金を貯め、勉強に時間を使い、まもなく帰国して主のために役立っている。

ストージが日本人達に伝えようとしたものは西欧文明の物質的側面でなく、精神的なものの大切さであった。彼の詩集 *The Spirit of Japan* (1903) ではカリフォルニアに渡ってくる日本人が物質的な富よりももっと価値ある宝である福音、神の言葉を身につける事の重要性を詩にして詠んでいる。[102] 彼の「米国へ来らんとする人へ忠告」(『渡米新報』一九〇七年五月一七日) には、

余が諸君に語り度は聖書を研究せられん事である聖書は実に生命の書にて何人も之を学ばずしては何事も成功せざるべし徒に渡米して多くの成功せざるは他になし徒に外形の成功や物質上の幸福を希望して根本たる神を信せず生命に関して更に頓着なく日々の誘惑に暴露せられて遂に之に抵抗する事も出来難く失敗に終るもの多きは固より其所であると思ひます日本は今や日の出の勢を以て進歩せり然れとも其精神上の進歩更に大切なる事を知らん事を希望するのである殊に海外に飛び出して事をなさんとする青年の如きわ一層此精神上の進歩発達の必要を認めて貰ひたいです聖書を研究せよ神を信せよと余は諸君に勧むるものである……

という言葉も見られる。日本人書生達がストージから受けた感化は大きかった。柏村桂谷の『北米踏査大観上巻』

（一九一〇年、三五五ページ）には、「日本青年の此会（青年会―吉田）に出入して、ストージ博士の感化を受けたるもの少からず、此会は純然たる基督教的の教育的団体にして、ストージ博士が此会の為めに、投じたる資産は、優に四万弗を越ゆるなるべし、博士は品性極めて高潔にして、夙に身を日本人の感化事業に投じ、殆んど之を以て自己生涯の事業とせるものゝの如し、左れば会員にして博士の訓陶を受けたる者、皆其徳の高きを称せざるはなく……」と評されている。

もうひとつ帰国後牧師になった平塚勇之助の証言を紹介しよう。平塚は一九三四年一一月一八日、ストージ博士全集に投じた原稿で次のように語っている。[103] 平塚がストージに初めて会ったのは一八九八年の青年会の祈禱会であった。その時「博士の御姿を見た瞬間に私の心は何と云う神々しいお方であろうかと一種のインスピレーションによって非常に打たれました」。その後二カ月ほどしてからストージは彼を含めて四～五人の青年達に毎木曜日午後約二時間ほど英語とラテン語を教えてくれたが、「それは余りに尊い博士の犠牲であったと存じます。私は博士の此の御指導によって今日大なる恩恵を享けておりますが、それよりももっと貴重なもの、即ち博士の人格を通しての神への信仰をこの時日に示された事は感謝の外ない所であります」。ストージはある時「私はあなた方に或ものを与える。それは金銭によっては購い得ず、学問によっても得られないもので、唯イエス・キリストを信ずることによって与えられる神よりの賜物である」という意味の説教をしたが、その時の聴衆は「粛然として深き霊感に満たされたことを記憶しております」。ストージは夫人とともに数回日本を訪問したが、その度に「宗教界、教育界、実業界、政界、又は其他の多くの諸名士から誠に心からの歓迎を受けられた」し、また「我輩直接に鴻恩を受けた者からの歓迎を心から喜んで下さいました。そして私は博士にお目にかかる度毎に霊感に依りまして一層高きに導かれた経験を与えられた一人であります」。さらに、

博士の崇高な御人格に接した時に、私の不遜な心が新たに生かされたことは、恰もかのナタナエルが主イエス・キリストに依って大いなる光を与えられたようであると思い、私は博士に対し感謝の辞を知らないものであります。ナタナエルは主イエスに遭い奉りし時に「ラビ、汝は神の子なり、汝はイスラエルの王なり」と叫びましたが、私も博士に「ストウジ博士はイエス・キリストの如き御方であった」と絶叫せざるを得ない一人であります。

彼の言葉を鵜呑みにすることはできないが、ストージが彼の生き方を規定した事は確かのようである。平塚だけでなく、ストージに出会った多くの日本人がその「神々しい」容貌に圧倒され、その人格に魅了されたようである。

彼に影響を受けて牧師になった稲沢謙一はストージが日本人達にとってキリスト教的人格の理想であったとして次のように語っている。[104]

我々の博士を知る日本人達は彼を徹底的にキリストの心を体現する理想的なクリスチャン紳士(an ideal Christian gentleman)だと評する。……日本人は彼を「キリストのような」(Christlike)指導者であると見なし、彼の生徒にとっては理想的な教師であり偉大な敬愛の対象である。ストージ博士夫妻に出会った全ての青年達は愛する事を学び、逆に彼らを両親のように愛するようになる。彼らの愛によって数百人の青年達が祖国を離れた遥かかなたの地でキリストに導かれる。

博士の教育の理念は彼の生徒達によい例を示す事で生徒達が強いキリスト教的人格を滋養することにあった。

夫妻は我々日本人に幸福な家庭生活のすばらしいイメージを与えてくれ、また多くの「キリストのような」模範を我々に示してくれた。[105]

教化活動の成果

ストージは多くの在米日本人を教育し、日本に送り返した。それは日本伝道に寄与する指導者を養成し、送り出す機能をある程度持っていた。ストージ自身自分の目でその成果を確認する機会が三回あった。具体例をあげると、一九一五年の訪日の際ストージはかつて太平洋岸のミッションに連なっていた会員達が日本の政界・財界・教育界・キ

リスト教界で活躍しているのを目のあたりにした。[106] 彼は本部への報告書に以下のように書いている（Sturge, "Japanese in California," Dec. 1, 1914—Dec. 1, 1915, PHS）。

いたるところで私はカリフォルニアの我々のミッションで何らかの利益を得た青年達に会った。サンフランシスコの教会か青年会に一時期連なっていた人々がたぶん五〇〇人以上日本にいる。太平洋岸諸州で長老派ミッションの会員であった者達は大抵立派にやっており、政界、専門職、財界の高職についている。総理（私）は特に、多くの日本人達が教会とつながっていなくともアメリカの教育機関で教育を受けたのでアメリカの国民に対して暖かい親善の気持ちを持ってくれていることに感銘を受けた。アメリカの学校や大学で日本人を可能な限り多く教育するより国際平和や日本の発展にとってためになる投資はないように思える。

ストージの感化を実際に受けた日本人がどのような分野で活躍したのかを知るために、ふたつの資料を用いて**表4**を作ってみた。資料として『在米日本人長老教会歴史』（一九一一年）及び「ストウジ会」（一九三三年一月二八日）を使用した。前者はストージの日本人伝道二五周年を記念して出版されたもので、一九一一年までのサンフランシスコの青年会と長老教会出身者のリスト（付録六）が掲載されている。後者は一九三三年一月二八日に開催された「ストウジ会」の出席者名簿である。[107] 二つの資料の人数合計は一四〇人となり、その内訳は日本在住者五八人、アメリカ在住者三九人、その他の地域在住及び在住地不明者四三人となる。こうした印刷物に名前を残した以上はストージとのつながりをかなり意識した人々であったと思われる。五〇〇人以上にのぼるとされるストージ門下生の全てを調査する術がない以上、一四〇人に過ぎなくても傾向をつかむ糸口にはなると思われる。

一四〇人の職業を以下の表の職種に分類する（**表5**参照）。この表を見ると、広い意味で教化・啓蒙に直接関わる職業（伝道師、牧師、教員、神学校教員、国会議員、市会議員、新聞記者）に就いている者が全体の三七％（五二人）を占めており、そのうちキリスト教伝道・教育に直接関わっている者が四八％（二五人）に達している。ストー

ジと長老派が特に青年や知識人を対象に伝道し、日本人の教化・啓蒙に携われる指導者を養成したいとする願いは数の上ではある程度実現しているように思える。次に個別日本在住者だけを対象にしてその特色を見ると、全体の五二％（三〇人）が教化・啓蒙に関わる職業に就いており、そのうちキリスト教伝道に関わる人々が五三％（一六人）になっている。ストージが三五年以上にわたって提唱し続けた日本教化の担い手は少なからず育っており、キリスト教界・教育界他で活躍していた。興味深いのはストージと直接関係のある医師になった者が二〇人もおり、全体の一四％にまで達している。[103] 今後各人の足跡を検討する事で、ストージの意図が単に数字上だけでなく実質的に現実のものとなっているかどうかが一層明らかになろう。

むすび

諸派にとって所属会員が納得できるような在米日本人伝道の積極的意義、根拠を提示することは生やさしいことではなかった。外国伝道として在米日本人伝道を位置づけるというのは初期の日本人の非定住性、在米日本人の習性から導き出された一つのアイデアであった。プロテスタント諸派は持ち前の使命感からアメリカに渡ってきている日本人を隣人として迎え入れ、世界を救い得る唯一の教えであるキリスト教を伝える責務を感じた。しかし責任を感じることと実際に責任を果たすこととは別の問題であった。サンフランシスコ地元の長老派クリスチャンはいわゆる純粋な動機で日本人伝道に着手したのであったが、誰が責任を持って伝道を担っていくのかという問題に直面した時に、自らでは負いきれないと判断して外国伝道局に託した。日本人が外国人であり将来のアメリカ人候補者ではなく、帰国後日本の教化に寄与する可能性があるという思いつきの理由が外国人伝道局に責任を転嫁する根拠となり、日本人

伝道の有り様を規定することになった。地元の教会から日本人伝道を押しつけられた外国伝道局はそれを中国人伝道部の一部程度以上には考えておらず、中国人伝道部から推薦されていたストージにその責任を押しつけた。ストージ自身はそんなことは知らず日本人伝道に使命感を感じて関わり、恐らく伝道局の期待以上に伝道に没頭してしまった。そのため彼は伝道局のいい加減さを痛感するようになり、不甲斐ない本部を批判するようになった。

伝道局と地元カリフォルニアの教会はお互い責任のなすりつけ合いをやり、結局在米日本人伝道が外国伝道に寄与するものであるから外国伝道局の管轄下にあるべきであるという地元の意見が通った。折角伝道局の管理下に日本人伝道を置いたのにまた責任を転嫁されたのではたまらないという地元の思いがこの実体が不確かな根拠をさももっともらしい理屈に変えた。地元としてはただでさえ排日問題等で「厄介者」になっている日本人への伝道に責任を持とうという思いはなかった。本来隣人愛から日本人への伝道が開始されたのではあったが、もはやそうした純粋な信仰的使命感は通用しないものとなっていた。ストージはこうした地元の姿勢に常に批判的であった。彼は地元が元来持っていた隣人愛、信仰的使命感を継承して地元から押しつけられた日本人伝道を続けて、少しでも発展させようとしていたのである。外国伝道としての在米日本人伝道という苦し紛れの理屈もストージの手でいつしか実体をもつようになっていった。彼はアメリカに渡ってきた日本人に「キリスト教国」アメリカが本来持っていたはずの信仰を教え、日本伝道に寄与できる人材を育てる努力をした。こうして実体のないところから生まれた外国伝道としての在米日本人伝道というアイデアは地元カリフォルニアの教会にとっては責任転嫁の屁理屈であったが、外国伝道局はこの屁理屈に縛られて重荷を負わされるはめになった、そして外国伝道局の重荷を実際に担ったのはストージであり、彼がこの屁理屈に息を吹き込んだのであった。ストージがカリフォルニアの教会を魂のない外面クリスチャンのように批判するのはこうした実情があったからでもあった。

ストージは地元が捨てた日本人を代わって面倒見ることになったのである。彼が日本人の優秀さを必要以上に賞賛したり、地元キリスト教界から自給独立した民族教会を設立しようと奔走したり、ひたすら日本での教え子の成長に望みを託したのはこうした背景があったからではなかったか。[109] そしてストージがキリスト教化とアメリカ化を区別し日本人の同化、アメリカ化をさほど強調しなかったのはアメリカの「キリスト教文明」に失望せざるを得ない局面を嫌という程経験してしまった故であった。[110]

註

(1) "No More A Christian Nation: The Protestant Church in Territorial Hawai'i, 1898—1919" (Ph. D. Diss., History, University of Hawaii, 1983), pp. 196f.

(2) 拙稿「日本ミッション〝支部〟としてのハワイ伝道——O・H・ギューリックとハワイ日本人伝道」(『キリスト教社会問題研究』三六号、一九八八年) 参照。

(3) 未知なる国へ伝道師を派遣して教化事業にあたらせる従来の伝道形態とは異なり、訪問者を感化せしめてその祖国の伝道にあたらせようとする新しい形態は、何か画期的な戦略(手段)となったわけではない。在米日本人伝道は成り行きでもってその形態を特徴づけられたのではなく、他に意味づけができない程、困難の多い事業であった。伝道対象として無視できない程在米日本人は増加し、そのコミュニティは急激に成長した。他方、クリスチャンであるはずのアメリカ市民はそれを脅威と把え、排斥は激化の一途をたどった。とりあえずやったことが定着してしまったのなら、そこにはまだ伝道し続けているという前進が見られる。しかし在米日本人はアメリカのすべての立派な理念を不問にして受け入れたくない人々になってしまい、教会としても受け入れたくないという感情は同一であった。

(4) California Annual Conference, MEC, *Minutes of Sessions* (1885, 以後 CAC, MEC, MS と略す).

(5) CAC, MEC, MS (1887).

(6) Missionary Society, MEC, *Annual Report* (1892, 以下 MS, MEC, AR と略す).

(7) "Pacific Japanese Mission" (Board of Home Missions and Church Extensions, MEC, AR, 1909).

(8) F. P. Woodbury "Japanese and Chinese: Facts and Traits" (September, 1902).

(9) Harlan P. Beach, "The Orientals in America" (February, 1903).
(10) "The Reformed Church and Missionary Work among the Pacific Coast Japanese" (May 5, 1910).
(11) "Annual Meeting Boad of Home Missions" (*Reformed Church Messenger*, July 21, 1921).
(12) "Oriental Mission Workers Meet" (*California Christian Advocate*, November 18, 1920).
(13) CAC, MEC, MS (1894).
(14) ストージは "Orientals Amongst Us" (*The Assembly Herald*, August 1900) で次のように述べている。

我々の伝道対象は主に「サムライ」の子孫である。これらの若者達は常に貧しいが、高貴な思想と熱意にあふれた芸術的な才能を持っている。我々はあらゆる人々の魂が平等に創造者にとって価値あるものであると信じているが、しかし我々はこの階層の若者達が我々の贖い主の支持を得ており、教育がなく高尚さに欠ける大多数の人々よりも祖国に偉大な影響を及ぼす事を知っている。

The Church at Home and Abroad, *The Assembly Herald* はいずれも長老派の機関誌である (Presbyterian Historical Society [PHS] 所蔵)。

(15) MS, MEC, AR (1887).
(16) "Japanese in the United States" (*The Church at Home and Abroad*, July 1890).
(17) 彼は "Japanese and Chinese: Facts and Traits" と題して急増する日本人について、日本人の大半は若い男性で西洋文明 (Occidental training, western civilization) を学ぶためにアメリカに来てすぐに帰国する、彼らはアメリカの文明と接触し、アメリカの成功の秘密・その文明の根源がキリスト教であることを知る、としている。
(18) "Chinese and Japanese Mission" (*The American Missionary*, November 1902) にも、アメリカの日本人は大半が若者で教養がある、"all of them are strongly desirous of learning the ways of our American civilization" という報道が見られる。
(19) MS, MEC, AR (1887).

Gospel in All Lands (November 1889) でも在米日本人伝道と日本伝道との関わりの密接さを以下のように述べている。

The field here, though limited, is very inviting. Many converted here, are doing valiant service for Christ

in their native land. A large number are preparing for future special service in Japan.

Organized work among them must be carried on by the Christian churches of the city, or they will be guilty of disloyality of Christ and neglect to enter an open door.

(20) *Gospel in All Lands* (June, 1893) で、「当州の数百人にのぼる日本人の若者は現地の学校に入学し、知識の『隠された宝物』を熱心に見つけようとしており、彼らを文明化・キリスト教されたアメリカ人の善意に託すべきで」あり、「『極東』の優しき親切な隣人達は我々の学校の恩恵に浴するだけでなく、彼ら日本人はそれを越えて我々の文明の良きものの全ての源泉であるキリストの福音に到達しようとしている」と報じた。

(21) "The Orientals in America" (*The American Missionary*, February 1903) で、中国人・日本人共に「ひじょうに優れた能力を持つ人種」(races of great ability) であると評価しながらも、日本人は中国人より「上級」の人種の出であり、クリスチャンにはなかなかならないが一旦回心すると日本に大きな影響を及ぼす、と日本人の能力を特別視した発言をしている。

(22) *Gospel in All Lands* (December, 1890) は日本人はアメリカの作法や習慣によく適応しており、クリスチャンの性格や成長はすばらしい、と評している。

(23) Jukes Becker, "The Course of Exclusion, 1882—1924: San Francisco Newspaper Coverage of the Chinese and Japanese in the United States "(Berkeley: Ph. D. Diss., History, University of California, 1986), pp. 58f.

(24) アメリカ宣教協会の在米東洋人伝道秘書で後に総理になったW・ポンド (William Pond) が "Orientals in America" (*The American Missionary*, January 1907) で興味深い言及をしている。ポンドによると、この伝道で我々が直接目指すものは救いであって文化の発展や文明ではない。こうしたものはもし魂が救われればその当然の結果として自然に身につくものである。こうして中国と日本がキリスト教化され、キリストのためにこの世を制覇するためにアングロ・サクソン人種と手を繋ぐのである、そうすれば千年王国も間近になる、というのである。当時のアメリカ人クリスチャンがアメリカに渡ってくる移民のキリスト教化と世界のキリスト教化をひとつのものとしてとらえたことがよくわかる。

(25) 福音会の設立、分離については拙稿「カリフォルニアの日本人とキリスト教」を参照。

(26) ハワード長老教会と日本人との関わりは古い。資料が限られているのでそれほど実態は明かにできないが、一八六〇年代後半の時点で当教会は日本人のための日曜学校を開設している。同教会長老W・パルマー (Wales L. Palmer) がこのクラス

を指導していた。彼の一八六九年二月一四日の報告（"Report of the Superintendent," February 17, 1869 in *Annual School Report of Howard Presbyterian Church, 1860—1869*, San Francisco Theological Seminary 所蔵）によると、数は不明であるが、日本人がこの日曜学校に出席し、英語は読めないが漢訳聖書を用いてキリスト教を学んでいたとある。この日曜学校がその後どうなったのかは今後の究明を待たなければならないが、一八八〇年代になって当教会の日本人信徒が中心になって米国最初の日本人長老教会を設立した（拙稿「カリフォルニアの日本人とキリスト教」を参照）。

(27) 本稿で使用する長老派外国伝道局幹事、宣教師書簡は全て所蔵である。

(28) 実際最初に分離したグループ中より一八八三年二月四日、ハワード長老教会にタイラー福音会会員の赤峰瀬一郎（京都第一組合教会より）、白藤信嘉（大阪第一組合教会より）が転入した。また2度目に分裂したグループ中より伊達多仲、柳沢佐吉夫妻、柳沢ユナ、岸本ソーベイ、金子新三郎、中村隼雄、浜田銀次郎が、同年八月一二日にメソジスト派の影響を強く受けた福音会を脱会してハワード長老教会に転会した。さらに一八八四教二月三日に森田寿三郎が転入（大阪島ノ内教会より）、同八四年八月三日に伊東米次郎、鈴木重敬がハワード長老教会で受洗、三谷幸吉郎が転入（美以福音会より）、八五年二月一日にトナガワ・Kが転入（美以福音会より）した。これらのうち赤峰、白藤、伊達、柳沢、中村、浜田、伊東、三谷がタイラー福音会の会長となっていることから、ハワード長老教会員がタイラー福音会の主要部分を構成していたことがわかる（拙稿「カリフォルニアの日本人とキリスト教」を参照）。

(29) Wesley Woo, "Christianizing and Civilizing the Chinese in Nineteenth Century California" (*American Presbyterians*, Vol. 68, No. 3, Fall 1990), p. 169.

(30) F. F. Ellinwood's Letter to Loomis (November 12, 1884; December 24, 1884). 以下長老派外国伝道局の往復書簡は全てPHS所蔵のものである。

こうした傾向は長老派に限らなかった。メソジスト派も当初は中国人伝道部総理のO・ギブソン、F・J・マスター(F. J. Master)の管轄下にあり、彼らが日本人伝道を指導した。一八七七年にアメリカで設立された最初の日本人キリスト教組織である福音会は当初ギブソンの庇護下に成長していった。一八八五年に日本人伝道は中国人伝道部より独立し、一八八六年以降元日本宣教師M・C・ハリス、H・B・ジョンソンによって担われていく。会衆（組合）派の日本人伝道も当初中国人伝道部の管轄下にあった。アメリカ宣教協会の中国人伝道部の総責任者W・C・ボンドが日本人伝道を指導した（拙稿「カリフォルニア日本人とキリスト教」参照）。

(31) Presbyterian Board of Foreign Missions, *Annual Report* (1890—91, 以後 PBFM, AR と略す).

(32) ケールは一八八五年二月五日付の書簡 (Kerr's Letter to Ellinwood, February 5, 1885) でも、日本人伝道は宣教師を派遣するほどの規模でないこと、それゆえ日本人教師を雇えば充分であるとしている。彼の雇いたい日本人教師は、按手礼を受けている必要はなく、ただ優れたキリスト教的品性をもち、聖書をよく理解し、説教の経験があれば充分で、もし英語が理解できれば申し分ないというものであった。

(33) 年会準備委員会編『在米日本人長老教会歴史』(伝道廿五年祝会委員、一九一一年)、一八ページ。なお当教会の歴史一般については Christ United Presbyterian Church, *The Church's One Hundred Years In The Japanese American Community* (San Francisco, 1988) 参照。

(34) San Francisco Presbytery, *Minutes* (San Francisco Theological Seminary 所蔵).

(35) Ibid. この間の経緯は「米国桑港」(『福音新報』一八八五年八月二六日) にも掲載されている。

本年五月十六日の土曜日に長老教会の中会は数人の日本人の願により遂に日本人の新願者十四人と入会者十四人都合二十八人を以て日本人の長老教会設立したり長老には森田三棚 (三谷—吉田) の二氏を撰定す、又中会が之を守護することになり水曜日夜の祈禱会はカリンクーン (カーリントン—吉田) 教師が司り、土曜日の夜の祈禱会は長老ラベック (ロバーツ—吉田) 氏が司り、其他アルフライ女聖書研究会を司りニクラス女が咏歌を教へ、毎日曜の夜は英語説教あり (但し日本語に訳して説く)、又カリングーン師は毎週四回づゝ福音会の家に於て教と長老教会の月報に見たり……

とある。

(36) *Occident* (May 20, 1885).

(37) 拙稿「カリフォルニア日本人とキリスト教」、阪田安雄「衝突へ向かう軌道：明治期の日本人のアメリカ出稼ぎ(1)」(『大阪学院大学国際学論集』第三巻第一号、一九九二年六月) 参照。

(38) メソジスト派でも中国人部から日本人部を分離してハリスを日本人部総理に迎えたわけであるが、その理由として、この町の日本人への伝道事業が益々重要になったこと、太平洋岸への日本人移民が増加していること、同派ミッションが日本語で話し教えることができないこと、日本人と中国人をひとつの教会に一緒にすることができない事を上げている (MS, MEC, AR, January 1887)。

(39) Carrington's Letter to Ellinwood (July 27, 1885); Loomis' Letter to Rarkin (September 3, 1885), San Francisco

Presbytery, *Minutes* (April 28, 1885 and September 8, 1885).

(40) November 12, 1884; December 24, 1884.

(41) Loomis' Letter to Rarkin (September 3, 1885).

(42) Loomis' Letter to Ellinwood (May 3, 1886).

(43) ロバーツは書簡で (Roberts' Letter to Eillinwood, April 5, 1886)、カーリントンの教会就任と日本人伝道からの脱退に残念である、しかし日本人はアメリカ人宣教師が必要なのであると述べている。またもし中会が適任者が見つからない間カーリントンに日本人伝道を任せることを推薦し、また伝道局も彼を任命する気があるならば、今回の牧師就任は無意味である。というのはカーリントンのような適任者を日本人伝道のために見つけるよりも、その教会に就任できる牧師を得るほうがよほど易しいからである、と述べた。

(44) カーリントンは三度にわたって (Carrington's Letter to Ellinwood, July 28, 1885; August 11, 1885; February 25, 1886) 伝道局に対して、森田寿三郎を月給二〇〜二五ドルで助手 ("permanent helper")、通訳として雇用してくれるよう要求した。理由は、彼の時間がとれないために日本語を習得できないので、森田の通訳なしには伝道に成果があがらないからであった。また森田自身が助手としての条件を満たしていることが大きかった。その条件とは、彼が同胞を助けて就職斡旋、英語講義、学校、祈禱会、説教、福音会の通訳ができ、熱心なクリスチャンで、福音宣教に召命を感じられること、それに彼は日本人教会の長老及び福音会の会長に選ばれたほど人望があることであった。カーリントンはルーミス、ロバーツ、D・トムプソンの添え書きを伝道局に提出し、森田の雇用を何度も訴えた (Carrington's Letter to Ellinwood, March 16, 1886; Roberts' Letter to Carrington, March 15, 1886)。結局彼の要求は受け入れられ、森田は助手として採用され、一八八六年四月一日から学校、祈禱会、説教の通訳として働く事になった (Carrington's Letter to Ellinwood, Apirl 19, 1886)。

(45) Sturge's Letter to Ellinwood (February 4, 1886).

(46) PBFM, *Minutes* によると、一八八六年二月一五日のボード会議でストージの書簡が取り上げられ、彼の計画の承認が出ている。

(47) 尚、朝鮮へ派遣する医療宣教師の件に付いては、ストージは本部から適当な人材を見つけるよう依頼されていた (Sturge's Letter to Ellinwood, February 19, 1886; Ellinwood's Letter to Sturge, March 23, 1886)。

(48) Ellinwood's Letter to the Korea Mission (November 17, 1885); Ellinwood's Letter to Sturge (November 24, 1885). 一八八五年一一月一六日のボード会議では(PBFM, *Minutes*)、この問題がアランから提案された。伝道局はストージを朝鮮への医療宣教師の一人として一時的に任命する決議をした。

(49) Sturge's Letter to Ellinwood (June 9, 1886); Loomis' Letter to Ellinwood (June 14, 1886).

(50) E. A. Sturge's Letter to Ellinwood (January 3, 1886).

(51) PBFM, *Minutes*.

(52) Loomis' Letter to Ellinwood (June 21, 1886); Kerr's Letter to Ellinwood (March 23, 1887).

(53) CAC, MC, MS (1886). 同(1888)によると給料に家賃が付加されて二、〇〇〇ドルの経費をハリスに支給されている。

(54) Ellinwood's Letter to Sturge (October 12, 1886).

(55) PBFM, AR (1886—87).

(56) Sturge's Letter to Ellinwood (January 11, 1887).

(57) ストージ夫人も "The Japanese in America" (*Occident*, July 20, 1887) に日本人伝道の緊要性を訴える記事を掲載した。内容の要点を紹介すると、アメリカに渡ってくる日本人が日増しに増え、それに伴いわれわれの責任も増している。サンフランシスコの日本人伝道は成果を挙げており、日本人信徒は皆熱心である。日本人信者の中には医学や牧会を学ぶ者もあり、彼らが帰国後クリスチャンの教師や医者として祖国に大きな影響を及ぼす事は間違いない。長老派以外に、メソジスト、聖公会、会衆派が日本人伝道を手がけている。カリフォルニアの日本人伝道の展望は明るいが、この町の伝道を続けるのに必要な小さな出費で善い成果が伴うのかどうか問題である。どうか彼らの子供達である日本人に関心を示してほしい、というものであった。この記事も伝道フィールドとして日本人伝道は価値あるにもかかわらず、充分な財政支援をしていない長老派の姿勢を問題視している。

(58) Sturge's Letter to Ellinwood (November 3, 1887).

(59) PBFM, *Minutes*.

(60) PBFM, *Minutes* (March 18, 1889). "Personal Record of E. A. Sturge" (April 25, 1902) をも参照。

(61) PBFM, AR (1889, p. 177) は病気のみを理由として挙げている。"Foreign Mission Notes" (*The Church at Home and Abroad*, December 1889) でも健康上の理由のみをあげている。

(62) PBFM, AR (1890, p. 70) には、服部はプリンストン神学校の "undergraduate" で、"United Church of Christ" の牧師資格を持っている、とある。

(63) Sturge's Letter to Ellinwood (November 3, 1887).

(64) PBFM, AR (1890).

(65) ストージは一八五六年四月二九日にオハイオ州クリーブランドに生まれた（宮崎小八郎『ストウジ伝』、一九三五年参照）。一八七一年にイギリスにいる親戚を訪問したとき、彼は牧師か医者になって苦しむ人々のために尽くそうと決心した。一八八〇年、彼はペンシルヴァニア大学で医学を学び、「組織変質におけるアルコールの作用」（The Action of Alcohol on Tissue Metamorphosis）で医学博士（M. D.）の学位を取得した（M. D. Dissertation, University of Pennsylvania, January 23, 1880, Special Collections, Van Pelt Library 所蔵）。学位論文ではアルコールの影響で組織変化が大きく減るという従来の見解を補強する実験結果を提示するものであった。その後哲学博士（Ph. D.）も終えた後、タイ伝道に赴任したという。

尚長老派のタイ伝道については George Bradley McFarland ed. *Historical Sketch of Protestant Missions in Siam 1828—1928* (Bangkok Times Press, 1928) 参照.

(66) PBFM, AR (1881), pp. 60—63.

(67) ストージの伝道局宛伝道報告、書簡は全て PHS 所蔵のものである。

(68) Sturge's Letter to PBFM (March 10, 1882). 彼は年会報告で（PBFM, AR, 1883, p. 86）、病院の目的が病気の患者を治すだけでなく、偉大な医者キリストによって魂をも癒すことにあると述べている。

彼はまたペチャブリだけでなくバンコックにも英国の叔父の援助で病院を建てるべきであるとボードに提案した。ストージの叔父（George Sturge）はストージの病院設立に二三〇ドルを寄付してくれたが、バンコックの病院設立のためにさらに三〇〇ドルを寄付する約束をしてくれたという（Sturge's Letter to PBFM, March 24, 1882）。

(69) Sturge's Letter to PBFM (July 11, 1882).

(70) Sturge's Letter to PBFM (January 10, 1884).

(71) Lawrence N. Tonomura, "Building an Analitical Tool: Perspectives into the Altruistic Mode of Helping Behaviors" (unpublished paper, UCLA, n. d.) をも参照。

(72) PBFM, AR (1885), p. 98.

(73) 一八八三年度の年会報告 (PBFM, AR, 1883, p. 86) では、ストージはラオスの学校で教え、毎週火曜日には礼拝を行い、時に三〇人が出席していた、と報じている。

(74) PBFM, AR (1885), p. 96.

(75) Sturge's Letter to PBFM (April 2, 1885).

(76) PBFM, AR (1886, p. 113). George B. McFarland (前掲 p. 106) によると、ストージが建てた病院は彼が帰国後、"The hospital was left with no one to care for it" となったと評している。

(77) "Personal Record of E. A. Sturge" (April 25, 1902). PBFM, AR (1891, p. 64) も参照。

(78) 拙稿「カリフォルニア日本人教会の形成とE・A・ストージ」(『社会科学』四六号、一九九一年) 参照。

(79) ストージは "Mission Work Among Japanese in America-Its Influence in Japan" (*The Church at Home and Abroad*, July 1894) でも、アメリカの日本人伝道を葡萄の樹に例え、多くの日本人が当地で「真の葡萄の木」イエス・キリストの愛に接し成長し、その成果を祖国に持ち帰ってくれる、と述べている。

(80) "San Anselmo, April 28, 1898, H. C. Minton" (*Occident*, May 5, 1898).

(81) PBFM, *Minutes*.

(82) Sturge's Letter to Ellinwood (January 3, 1886) でも、「……この町に来る日本人は着実に増加しており、誘惑がいっぱいあるまっただ中にあってキリスト教的な奉仕をせずに彼らを放っておくべきではない」と述べている。

(83) "The Japanese in America" (*The Church at Home and Abroad*, July 1893) でストージはサンフランシスコを以下のように風刺している。

"The Japanese upon arriving here, find themselves in a city where there is no Sabbath law, and where sin is probably practised more openly than in any other city in the United States. They have heard much of our Christian country, but the example constantly before them undoubtedly causes many to stumble. To counteract, as much as possible, the temptations and evil influences among which they are obliged to live, we have provided for them a Christian Home..."

(84) 拙稿「カリフォルニア・プロテスタントと日本人移民」(『キリスト教社会問題研究』三八号、一九九〇年) 参照。

(85) また外国伝道局の年会報告（PBFM, AR, 1904, p. 362）でストージはこの時期の伝道方法の特色とその目的を報じている。寄宿舎、昼・夜学校、礼拝等による伝道活動をおこない、それによって「日本から渡ってくる外国人を肉体的・精神的・霊的に手助けして品性を高め、そして彼らを祖国に帰してそこでも主の大義を強化すること」であると。

(86) 拙稿「カリフォルニア日本人教会の形成とE・A・ストージ」、及び「サンフランシスコ日本人合同教会の設立」（『キリスト教社会問題研究』、四二号、一九九三年）参照。

(87) ストージは "The Japanese on the Pacific Coast" (*The Assembly Herald*, August 1910) でも「太平洋岸には約五万人の日本人がおり、また同数のアメリカ人長老教会員がいる。もし我々一人一人が日本人を一人づつイエスに導けば、短期間に五万人の日本人を祖国を教化する自給宣教師として送り返すことができる。これは確かに伝道事業を行う上で最も経済的なやり方である。不運にも我々アメリカの教会はこのために何もしていない……」と述べている。

(88) メソジスト派は英和学校を、会衆派、聖公会、改革派も夜学校をそれぞれ設立する他、定期刊行物も発刊して日本人の教化にあたった。学校について *Gospel in All Lands* (December 1890) は、「英語を学ぼうという日本人の飽くことのない要求を考慮して伝道の草創期より夜学校を営んだ」と語っている。学校教育活動は諸派にとって伝道の手段として重要であっただけでなく、それは日本人自身が諸派に期待するものでもあった。当時の日本人の大半が書生で教育を受けるために渡ってきているので、これらの施設は彼らの受け皿として、アメリカの大学やハイスクールに入学する準備をする予備校としての役割を担った。同紙は当時のサンフランシスコのメソジスト派の英和学校の様子を次のように報じている。学校は五〇人以上の学生の出席があり、学費は月額二五ドルである。卒業生はパシフィック大学に九人入学し、またその他の大学（De Pauw, Simpson, North Western, Syracuse, Middletown, Illinois, Wesleyan）や公立学校で多く学んでいる。これらの優秀なクリスチャンの学生が将来日本に福音を伝えるために奮闘してくれる事を思わずにはいられない、と。特に興味をひくのは、この学校の卒業生が日本伝道に貢献してくれる若者を養成するのに役立つと考えている点であり、当時のアメリカ人クリスチャンの日本人伝道観がよく表れている。

(89) 長老派の中国人伝道においては、他の教派と同様、教育事業に重点がおかれた。中国人伝道の初代総理となったルーミス（一八五八～九一年まで総理）はスピーアの伝道方法を継承して夜学校、日曜学校を発展させたのであったが、彼は学校教育が伝道事業の成果をあげるために重要な手段であると考えていた。とくに学校教育は中国人を訓練して中国伝道の準備をさせるのに有効であり、また中国人が宣教師によって直接キリストの教えを学ぶ最良の場であったのである（Wesley Woo,

"Protestant Work among the Chinese in the San Francisco Bay Area, 1850—1920", Ph. D. Diss., Graduate Theological Union, 1983, p. 42.)。一八八五年、サンフランシスコの長老派ミッションには中国人青年のための無料の夜学校があり、算数、文法、地理、歴史、作文、聖書などの学科目を教えていた。

(90) 幼学正道会は一八七二年にサンフランシスコの中国人長老教会で創設された。長老派中国人宣教師I・コンディットがその名付け親であった。彼は中国人を修養し、キリスト教を奨励する教育組織として従来よりYMCAがあるが、この組織を中国語に翻訳すると「幼学正道会」となることを提案した。その提案を受けて中国人クリスチャン達は以後この名前を中国人クリスチャンの組織名として採用する決定をした。正道会は当初教派にとらわれない組織で四〜五教派の会員が参加していたが、徐々に教派ごとに分裂していった。正道会の特徴をいくつかあげると、その目的は、お互いが善を発揮し、イエス・キリストの教えを学び、互いに愛し合い、誘惑に負けないように互いに助け合うためのものであった。会員の義務としては聖書の教えを学び、余暇を英語と中国語の勉強に励み、偶像崇拝や悪習を禁じることであった。会員になるためには正会員の推薦を得てしかも会の三分の二の承認を得る必要があった。正道会は礼拝や聖書研究会を催した。また寄宿舎、救済事業など様々な社会的機能をもっていた。しかし後に宣教師達は正道会が世俗化して伝道的役割を果たさなくなったので解散を要求するようになった(Wesley Woo, "Chinese Protestants in the San Francisco Bay Area," in Sucheng Chan ed., *Entry Denied: Exclusion and the Chinese Community in America*, 1882-1943, Philadelphia: Temple University Press, 1991, pp. 225-234)。

(91) 基督教育年会設立の経緯については拙稿「カリフォルニアの日本人とキリスト教」参照。

(92) こうした長老派日本人クリスチャンの青年会設立までの歩みは独自なものでなく、当時青年会とともに双璧的な存在であった美以派福音会も類以した展開をみせた。タイラー福音会が分裂した後、母福音会はO・ギブソンの指導のもとにメソジスト色を強め、一八八六年にメソジスト派の一ミッション(教会)となる。しかしその後福音会の活動と教会の活動が調和しなくなり、M・C・ハリスの強力な指導のもとに一八九一年に福音会と教会が分離独立する。一方会衆派では、年代はかなり後になるが、一九〇三年にサンフランシスコに日本人ミッションが設立され、同時に日本人キリスト教組合会(Congregational Association of Christian Japanese)も組織された。この組合会はYMCA的な組織で、一八七一年頃在米中国人伝道のために設立された中国人キリスト教組合会(Congregational Association of Christian Chinese)と類似のものであった。

(93) "Japanese Young Men's Christian Association" (*Occident*, September 21, 1887).

(94) PBFM, AR (1893, p. 74). また『在米日本人長老教会歴史』、二二ページ参照。

(95) PBFM, AR (1893, pp. 74f.).

(96) 「日本人基督教青年会」(『福音新報』一八九六年七月三一日)でも当時の青年会の教勢が報じられており、会員は百余名、寄宿舎は増築中、伝道部では「礼拝説教聖書研究祈禱会」があり出席者六〇余名、教育部では夜学校に生徒三〇余名、土曜日夕には文学会が催されている、とある。

(97) 『福音新報』(一八九七年九月三日)にも同一タイトルで同一内容の記事が掲載されている。

(98) PBFM, AR (1893, 1894, 1900) 参照。

(99) そのうち教育クラスへの出席者数は年を経るに従って増加していった。以下該当年度の外国伝道局年会報告(PBFM, AR, 1886-1902)によって調べると、二六人(一八八六年)、二〇人(一八八七年)、二五人(一八八九年)、二〇人(一八九二)、三七人(一八九三年)、三七人(一八九四年)、三五人(一八九五年)、五〇人(一八九八年)、六五人(一九〇〇年)、五〇人(一九〇一年)、八〇人(一九〇二年)となる。

(100) 「北米日報の発行」(『福音新報』一八九八年一二月九日)。
以下、青年会が出版に直接間接に関与した定期刊行紙をあげると、『桑港新聞』(一八九三年に同会と福音会、日本人会と共同して出したもの)、『桑港新報』(一八九三年五月に『桑港新聞』と改名)、『新世界』(青年会幹事の副島八郎が一八九四年に出す)、『北米日報』(青年会が一八九八年に出す)、『日米』(『北米日報』と『桑港日本新聞』が合併して一八九九年に安孫子久太郎によって出される)、『太平』(一九〇三年に青年会が出す)などがある(『在米日本人長老教会歴史』参照。また田村紀雄・白水繁彦編『米国初期の日本語新聞』など参照)。

(101) "Japanese, S. F." (*Occident*, April 20, 1887); "Japanese Young Men's Christian Association" (Ibid.)、また「桑港通信在米国桑港一信徒」(『基督教新聞』一八九〇年二月一四日)など参照。

(102) たとえば "The Gospel Mine" "Better Than Gold" 参照。

(103) 平塚勇之助『神によりてやすし—平塚勇之伝』(ヨルダン社、一九八九年)、九六～九八ページ。本書の入手に当たっては平塚敬一氏の協力を得た。

(104) Joseph K. Inazawa, "Conclusion" (August 11, 1903) in *The Spirit of Japan*, pp. 126—129.

(105) 甲賀綏一もストージの薫陶を受けて牧師になったひとりである。甲賀は一九歳の時に渡米し、サンフランシスコの青年会にいたときにストージから伝道者になるよう薦められた。甲賀はサンフランシスコ神学院を一九一九年に卒業後牧師として日系教会で活躍した(Sumio Koga, "Dr. Ernest Adolphus Sturge," *A Centennial Legacy*, 1977, p. 28)。

(106) 一九一五年に「大正天皇」即位式に在米日本人を代表して、彼は桑港日本人基督教会牧師の宮崎小八郎とともに聖書を献上するために日本へ行った。彼は日本滞在中に東京、仙台、名古屋、京都、大阪を廻り、東京青年会、青山学院、明治学院、小石川基督教会、東京教役者会、神田日本基督教会、女子学院、平和協会、両国日本基督教会、朝鮮学生青年会、日本基督大会、東京聯合共励会、麹町日本基督教会、関西学院、神戸女子神学校、神戸基督教青年会、組合教会総会などを訪ねた(「ストージ博士の来朝」『基督教世界』一九一五年九月二三日、「ストージ博士の動静」同、一九一五年九月三〇日、「ストージ博士歓迎演説会」同、一九一五年一〇月一四日等参照)。

(107) 拙稿「カリフォルニア日本人教会の形成とE・A・ストージ」参照。

(108) その典型的な例として、彼は当時日本人ミッションを担当していたケールの報告(PBFM, AR, 1890, pp. 71f.)に出ていた「カワカミ・マサヤス」を次のように紹介している。カワカミは一八七六年に一七歳の時に前原の反乱(萩の乱?)に参加して政府に反逆したため逮捕され、投獄されたが、革命が敗北に終わったので釈放された。カワカミによると、反逆の目的は外国人、西洋文明、特にキリスト教を日本から排斥するためのものであった。やがて彼は日本に新しい秩序が浸透されるべきことを悟り、その準備のために東京で外国の医学を学び、一八八二年に開業許可を得た。一八八五年に彼は英語の勉強と医学の高度な勉強のためにサンフランシスコに渡った。到着後長老派のミッションに連れてこられ、ここで自分と同じ境遇の同胞と出会った。ストージ夫人は毎夜彼を教え、ストージは昼間彼に特別講義をした。その年、彼は回心し教会員となった。彼は州立大学に入学し、二年間医学を勉強した。開業医となった彼は、毎週一定時間、同胞のために無料診察を行った。約一年前、全会一致で彼は長老に推挙され、帰国するまで教会に献身的に奉仕した。家族が懇願したので、彼は帰国する決心をし、数週間前出航した。帰国する前、彼は長老の解雇状を得、東京の長老教会に転会するかに見えたが、彼は特にたくさん仕事をする余地のある小さな教会のひとつに転会状を書いてくれるようケールに要求した。というのも大きい教会は働き手がたくさんいるからである、わざわざこの人物を年会報告でとりあげたというのは、この人物が単に長老派の在米日本人伝道の一成果を具現しているだけでなく、最も彼らが願っている日本人伝道の対象と目的をも示しているからである。カワカミについてはストージ夫人も次のように書いている。「若者達はここに滞在するのが目的で渡って来るのではな

い。多くは東部に渡り、他の者達は地方に散らばり、一方蒸気船が出発するごとに数名の日本人が「日出づる国」に帰っている。もしこの町に来る若者達がキリスト教のみの感化を受け、回心し、帰国して“sweet, sweet story”（福音—吉田）を伝えることになれば、我々はうれしい。我々の教会員のほとんどは信仰熱心であり、未信徒にすばらしい影響を与えてくれると信じている。教会員のひとりが最近帰り、クリスチャンの医者として活躍している。彼がすでに妻をキリストに導いたということを彼の手紙で我々は知った」（“Report of Japanese Work in San Francisco” *Occident*, July 24, 1899）。

(109) 拙稿「カリフォルニア日本人教会の形成とE・A・ストージ」参照。

(110) 拙稿「カリフォルニア日本人のキリスト教化教育とアメリカ化—E・A・ストージの『異教徒』移民・文化受容の姿勢」（同志社大学アメリカ研究所編『一〇〇年前のアメリカ—世紀転換期のアメリカ社会と文化』、山口書店、一九九四年中刊行予定）。

表1—1　カリフォルニア地元アメリカ人による日本人教会への協力・援助

教　　会	内　　容	資　　料
サンフランシスコ		
長　老	Rev. D. Thompson（元日本宣教師）が説教する	O（1886, 1, 6） PBFM, AR（1886）
	Rev. A Kerr（在米中国人伝道宣教師）が臨時で礼拝担当	PBFM, AR（1886）
	Rev. Carrington が夜学校のために雇われる	同上
	Alexander（SFTS）と Kerr が神学生を教える	O（1887, 4, 20） PBFM, AR（1887）
	James B. Roberts（ハワード長老教会長老）が隔週土曜の会合担当する	PBFM, AR（1887） O（1887, 9, 21）
	Rev. John Carrington が水曜日夜の祈禱会に出る	同上
	Mrs. Page, Russell（婦人オキシデンタル伝道局）が日中人を訪問する	PBFM, AR（1892）
	入会は Rev. I.M. Condit（在米中国人伝道部）が行っている	PBFM, AR（1894）
聖公会	Mrs. Hippisley, Mrs. Wheeler が毎月3回土曜日に歌を教える	PC（1901, 3, 15）
	Rev. J. O. Lincoln（San Mateo）が毎月最初の日曜日聖餐式司式	PC（1903, 10, 1）
	Mr. J. C. Astredo が教えている	PC（1909, 8, 15）
組　合	Mrs. E. A. Kelley, Miss Stella Burgess, Miss. Flora Jordan, Miss Florence Coutts が学校を助ける	CCM, AR（1904）
	Miss. Flora Jordan, Miss Florence Coutts が学校を助ける	CCM, AR（1905）
	Miss F. B. Coutts, Mrs. Addie Burgess が学校を助ける	CCM, AR（1906）
	Miss F. B. Coutts, Mrs. B. Kelley. Miss G. E. Belton が学校を助ける	CCM, AR（1907）
	Miss F. B. Coutts, Mrs. B. Buron Kelley が学校を助ける	COM, AR（1908）
	Miss F. B. Coutts が学校を助ける	COM, AR（1909）
	Miss Ada C. Younman, Miss Jennie Garfield が学校を助ける	COM, AR（1910）
	Mrs. H. Wilson が学校を助ける	COM, AR（1911）
	Mrs. Parch が学校を助ける	COM, AR（1912）
改　革	Miss Claribel Patrie が幼稚園を担当する	RCM（1915, 10, 21）

オークランド		
美　以	Ida Kelsey が学校を担当する	MS (1887)
	夜学校教師が Maxwell から6月に Mincher になる	GAL (1889, 11, 90, 12)
	Mrs. Humphrey (First Church) が活動を援助する	MS (1897, 1900, '06)
	Barrell が学校を担当する	PJM (1901)
	Prof. Veil が聖書クラスを担当。	
	Mrs. Cora Kling が教会音楽を担当する	PJM (1920)
組　合	First Church が毎月20ドル援助する	COM, QL (07, 12-08, 3)
	Mrs. Waite が手伝う	COM, Q (L1908, 3-6)
アラメダ		
(長老)	E.Y. Garrette が学校を担当する	PBFM, AR (1888)
	Miss Hoyt, Garrette が学校を担当する	O (1889, 5, 8)
バークレイ		
美　以	Trinity Church 会員が手伝う	PJM (1912)
パロアルト		
美　以	Mrs. F. M. Whitman が日曜学校を手伝う	PJM (1912)
	Mr. & Mrs. Earl D. Minton の助力で教会堂入手する	PJM (1924)
サンノゼ		
美　以	Kummer が手伝う	MS (1900)
ワッソンビル		
長　老	Mrs. J. A. Patton が学校を担当する	PBFM, AR (1905, '07)
		PBFM, AR (1908, '10)
モントレー		
長　老	日本人牧師給の半分をアメリカ人教会が負担する	PBFM, AR (1913)
	Monterey 長老教会より毎月25ドル援助有り	RWJPC (1913)
カーメル		
(長老)	Miss M. E. White が学校で教える	PP (1911, 8, 3)
サリナス		
長　老	Elder Jack が関わる	PBFM, AR (1902)
	数人のアメリカ人より財政援助有り	PBFM, AR (1907)

サクラメント		
美　以	Dr. White (Country 病院部長) が手伝う	PJM (1901)
	Sixth St. エポース盟会が夜学校、日曜学校を助ける	PJM (1906)
聖公会		
長　老	Miss Gaston が昼夜学校を担当する	RWJPC (1913)
ルーミス		
美　以	アメリカ人教会が手伝う	PJM (1920)
フローリン		
美　以	Bucher, Miss Alice Brown が協力する	PJM (1913)
	アメリカ人教師が幼稚園を担当する	PJM (1921)
	Perkins が日曜学校支部を担当する	PJM (1924)
ロンポック		
(長老)	牧師給をアメリカ人が支払う	PBFM, AR (1918)
フレスノ		
美　以	Graves が手伝う	MS (1900)
	会堂建築に当たりアメリカ人が500ドルを寄付する	
	First Church エポース同盟会が夜学校、日曜学校を手伝う	BHMCE (1907-8)
		PJM (1910)
	Mrs. Deyo (First Church) が日曜学校を担当する	PJM (1912)
組　合	Ina Baghy が学校を担当する	COM, QL (09, 9-10, 1)
ハンフォード		
長　老	Mrs. M. A. Harlow が担当している	PBFM, AR (1908)
	Mrs. Harlow, Miss Moore, Miss Gaston が学校を担当する	RWJPC (1913)
ベーカースフィールド		
美　以	Matherson が学校を助ける	PJM (1906)
ロングビーチ		
(長老)	Calvary 長老教会より毎月15ドルの援助有り	RWJPC (1914)
	3つの地元長老教会が伝道援助をしている	RWJPC (1921)
ロサンゼルス		
美　以	Mann が夜学校と日曜学校を担当する	PJM (1901)

	First Church エポース同盟会が手伝う	PJM (1905)
	Pettinger が手伝う	PJM (1906)
	会堂購入に当たりアメリカ人700ドルを寄付する	BHMCE (1907-8)
	Miss Anderson (婦人内国伝道教会地区代表) が訪問伝道、女性のための学校を行う	PJM (1908)
	Miss Harwood が手伝う	PJM (1913)
	S. Sumiolm が手伝う	PJM (1924)
長　老	Rev. Winn が手伝う	PBF, AR (1905)
	Mrs. Stever が学校を手伝う	PBFM, AR (1908, 09)
組　合 (2)	Alice E. Harwood が手伝う	P (1903, 1, 8)
	Miss A. R. Harwood, Miss J. Harwood が手伝う	CCM, AR (1903, 12)
	(ベ)Harrison が夜学校、日曜学校、共励会を担当する	CCJM, QL (1904, 8-11)
	(ベ)Harrison が毎月20ドル援助する	CCJM, QL(04, 11-05, 2)
	A. E. Harwood が家賃110ドルの3/4を出す	CCM, AR (1905)
	First Church が日本人教会に400ドルの援助予約	
	(ベ)Oliver は日本人教会に寄付する	CCJM, QL (1906, 1-4)
	Miss Mary E. Knox が学校で教える	COM, QL (1910, 1-6)
(改革)	John C. Horning が巡回する	RCM (1912, 4, 25)
	Evemeyer, Miss Vickstrom, Miss Shaley が手伝う	RCM (1923, 12, 20)
オックスナード		
美　以	Rev. J. H. Avery が手伝う	PJM (1905)
	会堂修理に当たって地区メソジスト教会より60ドルの援助有り	BHMCE, AR (1909)
サンタバーバラ		
組　合	Mrs. E. P. Searl が手伝う	CCM, AR (1903)
	Buther が指導する	CCJM, QL (1905, 2-5)
	会堂確保に当たって Mr. Carnegie が1500ドル支払う	COM, QL (09, 9-10, 1)
	Mrs. H. P. Butler が手伝う	COM, AR (1911)
パサデナ		
(組合)	日本人ミッション建物を First Church が用意する	P (1907, 5, 23)
	Miss Elizabeth Billings が手伝う	COM, QL (08, 9-09, 2)

ウィンタースバーグ		
長　老	日本人教師招聘にあたって地元長老教会が給料の半分を援助する	PBFM, AR (1907)
	Westminster Church が毎月40ドルを援助する	PBFM, AR (1913)
リバーサイド		
美　以	Corey が手伝う	MS (1900)
	Snell が夜学校と日曜学校を担当する	PJM (1901)
	Snell が学校を、Haywood が礼拝を担当する	PJM (1902)
組　合	Rev. Edward F. Goff (会衆教会) が授洗する	CCJM, QL (1906, 1-4)
ビサリア		
(長老)	Miss Gaston が手伝う	PBFM, AR (1913)
サンディエゴ		
組　合	Miss Jennie Garfield が手伝う	COM, QL (1910, 1-6)
		COM, AR (1911)
	Miss Jennie Garfield がキャンプ巡回をする	COM, QL (1912, 1-4)
レッドランド		
(美以)	Hartley, Spaulding が手伝う	MS (1900)
サラトガ		
(組合)	John Brown が手伝う	CCJM, QL (1907, 6-9)
	Sarah Brown が手伝う	COM, QL (07, 12-08, 3)
	Brown, Mrs. H. P. Butler が手伝う	COM, QL (1908, 3-6)
	Miss Brown が手伝う	COM, QL (08, 9-09, 2)

注：但し教派から任命された日本人伝道担当者については削除した。
　またサンフランシスコの日本人美以英和学校のアメリカ人スタッフについては別表を参照されたい。

参考資料：O=*Occident*　PP=*Pacific Presbyterian*　P=*The Pacific*　CC=*The Pacific Churchman*
RCM=*Reformd Church Messenger*　PBFM, AR=Presbyterian Board of Foreign Missions, *Annual Report*
RWJPC="Report of the Work among the Japanese on the Pacific Coast" (E. A. Sturge, PHS)
MS=Missionary Society, MEC, *Annual Report*　PJM=Pacific Japanese Mission, MEC, *Official Journal*
CCM, AR=California Chinese Mission, AMA, *Annual Report*
CCJM, QL=California Chinese and Japanese Mission, AMA, *Quarterly Letter*
COM, AR=California Oriental Mission, AMA, *Annual Report*
COM, QL=California Oriental Mission, AMA, *Quarterly Letter*

表1—2　桑港美以英和学校スタッフ一覧

期　間	スタッフ
1886～88年	島田重助（校長）、J. J. Cleveland、長谷川
1888～91年	安孫子久太郎（校長）、M. C. Sutherland、E. L. Jackson、B・佐藤。
	備考）GAL（1889, 11）では M. C. Sutherland (S. F.), E. L. Jackson (S. F.), Mary K. Maxwell (Oakland), A. Mincher (Oakland), Johnson (Honolulu) とある。
1891～92年	松野菊太郎（校長）
1892～94年	清水泰三（校長）
1894年～	佐々木三郎（校長）
1897年～	三谷雅之助（校長）
1898年～	Grace 教会の Mary Bowen, C. G. Davis.
1899年～	K・ナカツカ（校長）
1900年～	小畑久五郎（校長）、Davis, E. H. McIntosh、日本人2人。
	左近義弼（校長）
1900～01年	左近義弼（校長）
1901～02年	広田善朗（校長）、Gray.
	小畑久五郎（校長）
1902～03年	Milton S. Veil（校長）、8人（3人アメリカ人）。
1903～04年	Veil（校長）、S・北村含む8人（3人アメリカ人）。
1904～05年	Veil（校長）、Monroe Scott 含む7人（同）。
1905～06年	Veil（校長）、広田善朗、相原英賢。
1906～07年	Veil（校長）、9人（4人アメリカ人）。
	備考）『教会記録』(1907, 8,) では、ミセス・アダムス、ミセス・ブライス、ミス・エーア、ミス・フイツンヤー、スコット、ジョーンス、原田竹之助（書記）、江崎申太郎、町田秀孝、村上浅吉、須藤和四郎、足達真鈴とある。
1907～08年	Veil（校長）、Prof. Monroe Scott, Mr. Buchaman, Rev. Harry Milnes, Rev. Ward Platt, H. B. Johnson, E. R. Dille, Bishop Anderson, 広田善朗含む9人（同）。
	備考）『教会記録』（1907, 10, 30）では、モンロー・スコット、ミセス・アダムス、ミセス・ブライ

ス、原田竹之助（書記）、須藤和四郎、江崎申太郎、足達真鈴、谷口夫人、町田秀孝とある。

1908～09年　Veil（校長）7人。
備考）『教会記録』（1909, 7, 31）では、原田、斉藤（重光）、江崎、谷口夫人、アダムス夫人が教師名として上げられている。

1909～10年　Veil（校長）、Mrs. S. P. Adams、Mrs. テネグチ、原田。

1910～11年　Veil（校長）、8人（オークランド3人）。

1911～12年　Veil（校長）、Miss E. S. Rotterman, Mr. S. 江崎含む9人（昼5、夜4）。

1912～13年　Veil（校長）、9人（昼5、夜4）。

1913～14年　Veil（校長）、M. 町田含む。

1914～15年　Veil（校長）、M. 町田，T. 原田，S. 斉藤，T. トメタ，B. セキ，Mrs Hunt, Mrs. S. P. Adams, Mrs. Alice Price.

1915～16年　Veil（校長）、6人。

1916～17年　Veil（校長）、Mrs. S. P. Adams, Mrs. Martha Hunt, Mrs. Alice Price, Mrs. ミネ・カネコ、Mr. T. 原田，Mr. H. 町田。

1917～18年　Veil（校長）、Miss Lulu Hacock, John L. Hatfield (Prof., Ohio Univ.), Mrs. Adams, Mrs. Jones, Mrs. Price, Mrs. カネコ，Mr. 町田。

1918～19年　Veil（校長）、Dr. John F. Goucher, Mrs. Eleanor Trafton, Prof. Charles C. Bragdon, Dr. W. F. Anderson, Mrs. Philander Smith, Mr. W. E. Blackstone & his family, Mrs. Hicks, Rev. D. N. Stearns, John L. Hatfield.* 合計8人。

1919～20年　Veil（校長）、H. 町田，Prof. J. L. Hatfield その他。

1920～21年　Veil（校長）、Mrs. Alice Price, Mrs. Frances Hoover, Mrs. S. P. Adams, Mr. H. 町田, Prof. J. L. Hatfield, Mr. George Warren White, S. 白石、鈴木ジュン。

1921～22年　Veil（校長）、Mrs. Salby P. Adams, Mrs. Ellen Jones, Prof. John L. Hatfield, Miss Emma Dornin, Mr. H. 町田，Miss Elizabeth Rogers, 鈴木ジュン。

1922～23年　Veil（校長）、Miss Elizabeth Rogers, Miss ハナ・オカダ，Mr. H. 町田，Miss Dornin, Mrs. Dunean, Mrs. カネコ，Mrs. Hoover,（Hatfield 病気），Miss Sylvia A. Wheeler（パートタイム）.

1923～24年　Veil（校長）、*H. Machida, Miss Elizabeth Rogers, Miss Emma Dornin, Mrs. Marie Duncan, Miss Hana Oleada, Miss Sarah Sincalir.

1924～25年　Veil（校長）、H. 町田，Miss Elizabeth Rogers, Miss Emma Dornin, Mrs. Helen Morse,

	Miss Sarah Sinclair, Mrs. Marie Duncan.

参考資料：『桑港美以教会記録』(1894～97年)、MS (1887, 1900); GAL (November, 1889); California Annual Conference, MEC, MS (1898); PJM (1901, 1902, 1903).

備考：

* Prof. Hatfield。オハイオ大学出身。合衆国軍隊中尉 (1862年)。オハイオ州公立学校総理。オハイオ大学ラテン語・ギリシャ教授 (1919)。
* H. Machida, Miss Elizabeth Rogers (Chinese Night School),
  Miss Emma Dornin (Grace Church), Mrs. Marie Duncan (Secretary of the Fred Finch Orphanage),
  Miss Hana Oleada (U. B. C. National Training School in San Francisco 出身),

表2 長老派外国伝道局会計一覧，1884～1924年
（総計，及び在米中国人，在米中国人・日本人伝道部）

年度	総計（収入）	総計（支出）	残高	在米アジア人伝道
				（在米中国人伝道部）
1884	$690, 462. 76			$15, 938. 94
1885	746, 912. 40			14, 553. 83
1886	745, 366. 02			19, 274. 19
1887	722, 494. 90			17, 909. 57
1888	910, 775. 83			17, 896. 27
1889	852, 815. 85	901, 726. 85	44, 696. 62(－)	21, 275. 00
1890	892, 392. 69	907, 972. 00	60, 275. 93(－)	21, 867. 00
				（在米中国人・日本人部）
1891	1, 013, 921. 54	972, 517. 02	18, 871. 41(－)	24, 515. 54
1892	967, 034. 01			27, 247. 10
1893	1, 064, 504. 37	1, 008, 124. 60	1, 858. 72(＋)	42, 061. 77
1894	891, 465. 19	995, 921. 70	102, 597. 79(－)	32, 577. 75
1895	903, 930. 05	976, 102. 80	174, 770. 54(－)	27, 536. 21
1896	1, 057, 774. 65	929, 239. 25	46, 235. 14(－)	26, 054. 60
1897	884, 842. 38	936, 061. 71	97, 454. 47(－)	26, 768. 00
1898	979, 125. 55	878, 121. 38	3, 549. 70(＋)	22, 884. 64
1899	921, 093. 82	920, 206. 01	4, 437. 51(＋)	15, 490. 80
1900	953, 083. 77	946, 123. 38	11, 397. 90(＋)	12, 379. 08
1901	998, 325. 39	1, 008, 102. 15	1, 621. 14(＋)	13, 178. 41
1902	1, 128, 577. 29	1, 128, 906. 87	1, 291. 56(＋)	14, 974. 16
1903	1, 115, 133. 34	1, 115, 364. 97	1, 059. 93(＋)	16, 135. 62
1904	1, 131, 510. 70	1, 173, 261. 02	40, 690. 39(－)	16, 258. 00
1905	1, 197, 788. 28	1, 201, 430. 60	38, 762. 98(－)	17, 166. 19
1906	1, 182, 516. 11	1, 255, 054. 11	110, 918. 71(－)	16, 341. 46
1907	1, 276, 747. 85	1, 275, 998. 48	92, 146. 65(－)	16, 229. 05
1908	1, 347, 265. 20	1, 455, 017. 03	170, 731. 55(－)	20, 751. 61
1909	1, 526, 859. 37	1, 503, 232. 60	105, 481. 00(－)	22, 420. 42
1910	1, 457, 660. 80	1, 411, 613. 34	58, 665. 93(－)	19, 536. 45
1911	1, 718, 526. 46	1, 698, 523. 02	38, 662. 49(－)	21, 272. 13
1912	2, 877, 844. 96	2, 782, 768. 64	56, 421. 58(＋)	26, 353. 78
1913	1, 887, 342. 97	1, 952, 644. 55	65, 301. 58(－)	24, 212. 94
				（在米中国人・日本人・朝鮮人部）
1914	2, 171, 260. 08	2, 398, 108. 66	292, 150. 16(－)	24, 219. 97
1915	2, 286, 819. 73	2, 256, 334. 37	101, 013. 49(－)	24, 758. 58
1916	2, 287, 398. 81	2, 255, 918. 29	50, 058. 74(－)	29, 139. 97

1917	2,464,257.70	2,525,369.03	96,367.00(−)	28,192.67
1918	2,779,521.80	2,774,765.71	91,163.66(−)	26,725.50
1919	2,583,434.89	3,112,834.23	620,538.00(−)	25,350.06
1920	3,718,776.42	3,639,370.13	380,679.58(−)	23,399.00
1921	4,550,446.20	4,365,884.85	195,968.23(−)	31,365.50
1922	4,070,722.51	4,001,682.72	126,598.44(−)	39,607.22
1923	3,998,113.76	4,529,002.89	657,187.57(−)	38,317.05
1924	4,727,402.00	4,560,939.91	28,697.89(−)	25,766.00

注1）会計年度は1889年まで前年5月1日～当該年5月1日まで，1909年まで4月30日まで，1925年まで3月31日までである。

注2）1891年を境に日本人伝道の所属する部門が在米中国人伝道部から在米中国人・日本人伝道部という名称に変わり，再度1914年度より在米中国人・日本人・朝鮮人部に改名した。

参考資料：Presbyterian Board of Foreign Missions, *Annual Report*, 1884—1893, 1901, 1920, 1924

表3　サンフランシスコ日本人教会転入・転出者一覧

○桑港長老教会（1909～1914年）

転出者				転入者			
日本		米国		日本		米国	
長老教会	2人	長老教会	9人	長老教会	6人	長老教会	5人
		メソジスト教会	1	組合教会	1	組合教会	1
		改革教会	3	アライアンス	1	メソジスト教会	1
				美以教会	1		
				浸礼教会	1		
				その他	3		
合計	2人		13人		13人		7人

参考資料：Sturge, "Minutes of the Session of the Japanese Presbyterian Church of San Francisco" Vol. 2 (Christ United Presbyterian Chuch [CUPC], San Francisco 所蔵)

○桑港日本人基督教会（1915～1924年）

転出者				転入者			
日本		米国		日本		米国	
長老教会	1人	長老教会	12人	長老教会	12人	長老教会	11人
合同教会	1	合同教会	5	組合教会	6	組合教会	11
その他	2	改革教会	3	福音教会	1	合同教会	5
		メソジスト教会	3	浸礼教会	1	メソジスト教会	4
		救世軍	2	聖公会	1	改革教会	3
		キリスト教会	1	その他	13	その他	1
		その他	2				
合計	4人		28人		34人		35人

参考資料：『桑港日本人基督教会名簿』（CUPC 所蔵）

○桑港美以教会

米国の教会からの転入		日本の教会からの転入	
メソジスト教会	74人	美以教会	51人
長老教会	1	長老教会	7
バプテスト教会	1	南美以教会	5
		組合教会	3
		ギリシャ正教	2
		バプテスト教会	1
		美普教会	1
		アライアンス	1
		ルーテル教会	1
		普福音教会	1
合計	76人		73人

参考資料：桑港美以教会『会員記録』（1907年, Pine United Methodist Church, S.F.所蔵）

表4　基督教青年会及び長老教会会員一覧

会員名	職業（参考資料）
阿部　末治	レバノン日基教会員、貿易商（s, n）
阿久津謙治	科大学教授（s）
新井　正平	本郷組合教会員、札幌中学教師、東京小石川で伝道（p, n）
長　藤太	T.C.株式会社社長（s）
伊達　多仲	ハワイ商業家（p）
堂本誉之進	桑港北米貿易株式会社長（p）
藤田　芳槌	桑港歯科大学卒業（p）
古沢　孝	ロサンゼルス病院長（p）
藤村亀太郎	仙台高等商業学校教師（p）
藤岡　紫朗	新聞記者、在シアトル（p）
藤平　純三	桑港横浜正金銀行店長（s）
藤井　宏基	銀行員（s）
藤原　俊雄	九段メソジスト教会員、藤原商会主、東京市会議員（s, n）
文倉平次郎	以前古川銅山株式会社と関わりあり（s）
萩原　信行	東京麹町日本基督教会牧師（p）、仙台日基教会牧師（n）
林　熊男	整形外科医（s）
平塚勇之助	東京基督教会講義所伝道師（p）、上富坂教会牧師（s）
細貝富次郎	東京四谷基督教会伝道師（p）
星野乙次郎	神奈川県庁医官（p）
原田　次郎	名古屋高等工業学校教授（p）
原田　治郎	東京皇室碩物館員（s）
早田三四郎	芸術家（s）
保坂亀三郎	教育家（s）
服部　綾雄	岡山県選出代議士（p）
粕谷　儀一	京王電気株式会社勤務（p）
早川　雪州	雪州プロダクション社長（s）
早川安二郎	早川&本間株式会社（s）
長谷　吾市	ハンフォード農業家（p）
林　甚之丞	ストックトン農業家（p）
星　鉄太郎	貿易商（s）
今井　頼興	前青年会幹事東京で実業（p）
稲沢　謙一	ロサンゼルス長老教会牧師兼ウィンタースバーグ伝道館主任（p）
石川角次郎	滝野川基督教会（n）、東京聖学院長（p）
井出惣兵衛	ミシガン大学医科大学助教授（p, s）
池内　清光	ロサンゼルス池内病院長（p）
伊藤竹次郎	開業医（p）
岩村秀太郎	京都組合教会員、京都ミシン裁縫学校長（s, n）
石川源三郎	哲学博士、ハンブルク三井物産会社支店長（旧名定邦）（p）
石橋　直三	モントレイ洗濯業（p）
磯部　兼松	工学士、コロンビア大学在学（p）
磯部　房信	M.S.ウィスコンシン大学（p）、三井商事株式会社化学技師（s）

伊藤吉太郎	神戸大阪出版東京支店代表（s）
稲津　茂雄	ワッソンビル農業家（p）
河井　修三	農学士、ウィスコンシン大学卒、テキサス州牧畜業（p）
川崎巳之太郎	新聞記者、在東京（p）、市ケ谷日基教会員、内務省嘱託（n）
川上　昌保	東京川上病院長、白十字会理事長（p）
河野　　保	東洋宣教会上諏訪福音伝道館会員、諏訪中学校教諭（s，n）
君島　霜朔	前青年会幹事（p）
木村　義吉	伝道師（p）
小林　　誠	ストックトン長老教会伝道館主任教師（p）、両国教会牧師（s）
小林　政助	サリナス日本人長老教会伝道館主任（p）、サンフランシスコ救世軍（s）
小林　参卿	小林病院長（p）
小春　緑郎	医師（s）
小北皎次郎	中條組合教会伝道師（n）、大森教会牧師（s）
汲川　賢也	ハンフォード長老教会伝道主任（p）
草野　芳槌	長崎市東山学院副院長（p）
桑原作太郎	新聞記者、在シアトル（p）
小手川豊次郎	文学博士、一時東京で経済雑誌を発行（p）
梶岡　音吉	ワッソンビル農業家（p）
加藤　常助	東京瓦斯株式会社員（p）
木村　精三	工学士、東京三井物産会社機械部勤務（p，s）
岸本　槌彦	メキシコ実業（p）
小山源次郎	東京実業（p）
河野　　保	文学士南加大学（p）
松永　文雄	明治学院教授及び牧会（p）
三浦宗三郎	門司日本基督教会牧師（p）
宮崎小八郎	サンフランシスコ長老教会牧師（p）、共立女学校教頭（s）
村山三十五郎	医師（s）
正田伊三郎	文学士（s）
水野　孝信	肉商（s）
三崎　省三	工学士、阪神電鉄会社重役（p）
村上　藤吉	工学士、台湾製糖局技師（p）
村上実太郎	農学士（p）
村上義蹄〔諦〕	工学士（p）、石川島自動車製造株式会社技術長（s）
内藤　賀一	神戸神学校教授（p）
中島鎌太郎	東京加藤病院副院長、白十字会理事（p，s）
中村　正巳	医師（s）
中村　荘助	京王電気株式会社勤務（p）
中村　四郎	ロサンゼルス薬学士（s）
中元　銀弘	実業（s）
根来　源之	ハワイ法学博士（p）
野崎　末男	桑港野崎商会主（p）
西片　朝三	東京西片病院長（p）
西村丹次郎	岡山県選出代議士（p）

大堀　　篤	ニューヨーク市日本人修道会主任（p）
大野　直周	ロサンゼルス日本人長老教会代理牧師（p）、港川日基教会牧師（n）
太田　　寛	神学士（p）
小野瀬不二人	新聞記者、在東京（p）
大山卯次郎	元サンフランシスコ総領事（s）
奥野武之助	ニューヨーク州ブルックリン市日本人基督教会主任（p）
大久保逸次	桑港大久保歯科医院長（p）
岡　浪之助	ロサンゼルス岡歯科医院長（p）
小川　義雄	札幌、農学士（p）
落合　惣助	布哇で開業（p）
酒井安次郎	ワッソンビル農業家（p）
坂部多三郎	東京力行女学校教頭（p）、岩槻日基伝道教会牧師（n）
佐渡　高一	新聞記者（s）
鷲谷　精一	新聞記者（s）
佐藤悠次郎	大阪市会議員（p）
沢本富之助	新聞記者（s）
新道　伝吉	アメリカ総領事館秘書（s）
酒井　勝平	伝道音楽隊（p）
塩田	桑港美術品商（p）
瀬上　広成	東京神田日本基督教会牧師（p）、麻布教会牧師（s）
瀬本幸吉郎	九州ジャーマン・ルーテル教会神学校教授（旧名三谷）（p）
鈴木　忠誠	宮城中会所属教師として白石伝道（p）
鈴木真次郎	伝道師（p）
武田　駒吉	教師（p）
竹内三樹三郎	官吏、在朝鮮釜山（p）
田村　　清	南加大学卒業（p）
寺沢　久吉	桑港寺沢教館主（p）
高木　梅軒	歯科医（s）
田中　重平	ロサンゼルス田中病院長（p）
谷内　由松	医学士（p）
谷内　兼松	歯科医学士（p）
高橋画一郎	工学士（p）、大日本ビル株式会社技術主任（s）
寺岡　豊次	Asahi Scale Works 社会社社長（s）
富沢　　清	ミシガン大学卒、農学士（p）
鶴見　甲子	Tokai Enkan 秘書（s）
上野田節男	『ジャパン・アドバタイザー』編集長（s）
内田　　融	内田病院長（p）
脇本	鉄道工事局在勤（p）
和光　與平	東京電鉄会社取締役（p）
渡辺　　敢	神戸基督教会神学校教師（p）、二宮日基教会牧師（n）
渡辺栄太郎	新潟で伝道（p）、宮崎日基教会牧師（n）
渡辺　萬蔵	新聞記者（p）
保田　常吉	Express 会社所有者（s）

谷津善次郎	秋田市基督教会牧師（p）
柳沢ユナ子	三共製薬株式会社秘書（s）
山田福太郎	東京、経済学士（p）
山田　憲成	Tokyo Asahi Scale 株式会社課長（s）
山本新次郎	工学士、丹後生野銅山技師（p）、三井信託会社電気&鉄道部（s）
山田　嘉吉	作家、英語教師（s）
山本　又槌	ワッソンビル農業家（p）
山口　音吉	ワッソンビル農業家（p）
山田　わか	作家、評論家（s）
山田作太郎	新聞記者、在シアトル（p）
吉田半次郎	ワッソンビル農業家（p）
吉村　末吉	ワッソンビル日本人長老教会牧師（p）
吉田　茂人	札幌吉田病院長（p）

参考資料：『在米日本人長老教会歴史』＝p
“Sturge Kai”＝s
『日本基督教徒名鑑』（中外興信所、1914年）＝n

表5　基督教青年会及び長老教会会員職業分類表

職　　種	日本在住者	アメリカ在住者	そ の 他	合　　計
伝道師、牧師	11	6	2	19
教　員	7	2	4	13
神学校教員	5	1		6
国会議員	2			2
市会議員	1			1
新聞記者	4	3	4	11
医師（歯科を含む）	4	7	9	20
公務員	1	2	1	4
技　師	5		2	7
会社員	17	5	7	29
その他	1	13	14	28
合　計	58	39	43	140